

百人一首 二次元解析

山戸朋盟著

文字の大きさは、ブラウザの「設定」の中の「拡大/縮小」で調節して下さい。

YouTube に音声の解説があります。「朋盟」で検索できます。

解説を聞きながら読むと、分かりやすいです。

もくじ

上の句索引

- 1 秋の田の かりほのいほの とまをあらみ わが衣手は 露にぬれつつ
- 2 春過ぎて 夏来にけらし しろたへの 衣ほすてふ 天の香具山
- 3 足びきの 山鳥の尾の しだり尾の 長々し夜を 一人かも寝む
- 4 田子の浦に うち出でて見れば 白たへの 富士の高嶺に 雪は降りつつ
- 5 奥山に もみぢ踏み分け 鳴く鹿の 声聞く時ぞ 秋は悲しき
- 解説 1. 助詞の理解と訳し方
- 6 かささぎの 渡せる橋に 置く霜の 白きを見れば 夜ぞ更けにける
- 7 あまの原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に いでし月かも
- 8 わがいはは 都の辰巳 しかぞ住む 世を宇治山と 人は言ふなり
- 9 花の色は うつりにけりな いたづらに 我が身世にふる ながめせしみに
- 10 これやこの 行くも帰るも 別れては 知るも知らぬも 逢坂の関
- 11 わたの原 八十しまかけて 漕ぎいでぬと 人には告げよ あまの釣り舟
- 12 天つ風 雲の通ひ路 吹きとちよ をとめの姿 しばしとどめむ
- 13 筑波嶺の 峰より落つる みなのか 恋ぞ積もりて 淵となりぬる
- 14 みちのくの 信夫もぢずり たれゆゑに 乱れそめにし 我ならなくに
- 15 君がため 春の野にいでて 若菜摘む わが衣手に 雪は降りつつ
- 16 立ち別れ 因幡の山の 峰におふる 松とし聞かば 今帰りこむ
- 17 ちはやぶる 神代も聞かず 竜田川 唐くれなゐに 水くくるとは
- 18 住の江の 岸に寄る波 夜さへや 夢の通ひぢ 人目よくらむ
- 19 難波潟 短き芦の ふしの間も 逢はでこの世を 過ぐしてよとや
- 20 侘びぬれば 今はた同じ 難波なる 身を尽くしても 逢はんとぞ思ふ
- 21 今こむと 言ひしばかりに 長月の 有明の月を 待ちいでつかな
- 22 吹くからに 秋の草木の しをるれば むべ山風を 嵐と言ふらむ
- 23 月見れば ちぢにもこそ 悲しけれ わが身一つの 秋にはあらねど
- 24 このたびは ぬさも取りあはず 手向け山 もみぢの錦 神のまにまに
- 25 名にし負はば 逢坂山の さねかづら 人に知られで 来るよしもがな

- 天智天皇
持統天皇
柿本人麻呂
山部赤人
猿丸大夫

中納言家持
安倍仲磨
喜撰法師
小野小町
蝉丸
参議篁
僧正遍昭
陽成院
河原左大臣
光孝天皇
中納言行平
在原業平朝臣

藤原敏行朝臣
伊勢
元良親王
素性法師
文屋康秀
大江千里
管家
三条右大臣

- あ 行
あきかぜに
あきのたの
あけぬれば
あさぢふの
あさぼらけ
ありあけのつ
うぢのかはぎ
あしびきの
あはぢしま
あはれとも
あひみでの
あふことの
あまつかぜ
あまのはら
あらざらむ
あらしふく
ありあけの
ありまやま
いにしへの
いまこむと
いまはただ
うかりける
うらみわび
おくやまに
おとにきく
おほえやま
おほけなく
おもひわび

か 行
かくとだに
かささぎの

- 79
1
52
39
31
64
3
78
45
43
44
12
7
56
69
30
58
61
21
63
74
65
5
72
60
95
82
51
6

26 小倉山 峰のもみぢ葉 心あらば 今ひとたびの みゆき待たなむ
27 みかの原 分きて流るる いづみ川 いつ見きとてか 恋しかるらむ
28 山里は 冬ぞさびしさ まさりける 人目も草も かれぬと思へば
29 心あてに をらばやをらむ 初霜の 置きまどはせる 白菊の花
30 有明の つれなく見えし 別れより あかつきばかり うきものはなし

31 朝ぼらけ 有明の月と 見るまでに 吉野の里に 降れる白雪
32 やまがはに 風の掛けたる しがらみは 流れもあへぬ もみぢなりけり
33 ひさかたの 光のどけき 春の日に しづ心なく 花の散るらむ
34 たれをかも 知る人にせむ 高砂の 松も昔の 友ならなくに
35 人はいさ 心も知らず ふるさとは 花ぞ昔の かに匂ひける
36 夏の夜は まだよひながら 明けぬるを 雲のいづこに 月宿らむ
37 白露に 風の吹きしく 秋の野は 貫き止めぬ 玉ぞ散りける
38 忘らるる 身をば思はず 誓ひてし 人の命の 惜しくもあるかな
39 あさぢふの 小野のしの原 忍ぶれど あまりてなどか 人の恋しき
40 忍ぶれど 色にいでにけり わが恋は ものや思ふと 人の問ふまで
41 恋すてふ わが名はまだき 立ちにけり 人知れずこそ 思ひそめしか
42 契りきな かたみに袖を しぼりつつ 末の松山 波越さじとは
43 違ひ見ての のちの心に 比ぶれば 昔はものを 思はざりけり

44 逢ふことの 絶えてしなくは なかなかに 人をも身をも 恨みざらまし
45 あはれとも 言ふべき人は 思ほえて 身のいたづらに なりぬべきかな
46 由良の戸を 渡るふなびと かぢを絶え ゆくへも知らぬ 恋の道かな
47 やへむぐら 茂れる宿の 寂しきに 人こそ見えね 秋は来にけり
48 風をいたみ 岩打つ波の おのれのみ 砕けてものを 思ふ頃かな
49 御垣守り 糸じの焚く火の よるは燃え 星は消えつつ 物をこそ思へ
50 君がため 惜しからざりし 命さへ 長くもがなと 思ひけるかな
51 かくとだに えやは伊吹の さしも草 さしも知らじな 燃ゆる思ひを
52 明けぬれば 暮るものとは 知りながら なほ恨めしき 朝ぼらけかな
53 嘆きつつ 一人ぬる夜の 明るるまは いかにかしき ものとがは知る
54 忘れじの 行く末までは かたければ けふを限りの 命ともがな

貞 信 公
中納言兼輔
源宗于朝臣
凡河内躬恒
壬生忠岑

坂上是則
春道列樹
紀 友 則
藤原興風
紀 貫 之
清原深養父
文屋朝康
右 近
参 議 等
平 兼 盛
壬生忠見
清原元輔
権中納言敦忠

中納言朝忠
謙 徳 公
曾禰好忠
恵慶法師
源 重 之
大中臣能直
藤原義孝
藤原実方朝臣
藤原道信朝臣
右大将道綱母
儀同三司の母

かせそよく
かせをいたみ
きみがため
はるののにい
をしからざり
きりぎりす
こころあてに
こころにも
こぬひとを
このたびは
こひすてふ
これやこの

さ 行

さびしさに
しのぶれど
しらつゆに
すみのえの
せをはやみ

た 行

たかさごの
たきのおとは
たごのうらに
たちわかれ
たまのをよ
たれをかも
ちぎりおきし
ちぎりきな
ちはやぶる
つきみれば
つくばねの

な 行

ながからむ
ながらへば
なげきつつ

55 滝の音は 絶えて久しく なりぬれど 名こそ流れて なほ聞こえけれ
56 あらざらむ この世のほかの 思ひ出に 今ひとたびの 逢ふこともがな
57 めぐり違ひて 見しやそれとも 分かぬまに 雲がくれにし 夜半の月かな
58 有馬山 いなの笹原 風吹けば いでそよ人を 忘れやはする
59 やすらはで 寝なましものを さ夜更けて かたぶくまでの 月を見しかな
60 大江山 生野の道の 遠ければ まだ踏みも見ず 天の橋立

大納言公任
和泉式部
紫式部
大式三位
赤染衛門
小式部内侍

なげけとて
なつのよは
なにしおはば
なにはえの
なにはがた

86
36
25
88
19

61 いにしへの ならの都の 八重桜 けふ九重に 匂ひぬるかな
62 夜をこめて 鳥の空音は はかるとも よに逢坂の 関は許さじ
63 今はただ 思ひ絶えなむ とばかりを 人づてならで 言ふよしもがな
64 朝ぼらけ 宇治の川霧 絶え絶えに あらはれわたる 瀬々の網代木
65 恨み侘び ほさぬ袖だに あるものを 恋に朽ちなむ 名こそ惜しけれ
66 もろともに あはれと思へ 山桜 花よりほかに 知る人もなし
67 春の夜の 夢ばかりなる た枕に かひなく立たむ 名こそ惜しけれ
68 心にも あらで憂き世に 長らへば 恋しかるべき 夜半の月かな
69 嵐吹く み室の山の もみぢ葉は 竜田の川の 錦なりけり
70 寂しさに 宿をたちいでて なかむれば いづこも同じ 秋の夕暮れ
71 夕されば かどたの稲葉 訪れて あしのまるやに 秋風ぞ吹く
72 音に聞く 高師の浜の あだ波は かけじや袖の 濡れもこそすれ
73 高砂の 尾上の桜 咲きにけり 外山の霞 立たずもあらなむ
74 憂かりける 人を初瀬の 山おろしよ 激しかれとは 祈らぬものを
75 契りおきし させもが露を 命にて あはれ今年の 秋もいぬめり
76 わたの原 漕ぎいでて見れば 久方の くもゐにまがふ 沖つ白波
77 瀬を速み 岩にせかる 滝川の 割れても末に あはんとぞ思ふ
78 淡路島 通ふ千鳥の 鳴く声に 幾夜寝ざめぬ 須磨の関守
79 秋風に たなびく雲の 絶え間より 濡れいづる月の 影のさやけさ
80 長からむ 心も知らず 黒髪の 乱れて今朝は ものをこそ思へ
81 ほととぎす 鳴きつるかたを 眺むれば ただ有明の 月ぞ残れる
82 思ひ侘び さても命は あるものを 憂きに耐へぬは 涙なりけり
83 世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る 山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる
84 長らへば またこのごろや 偲ばれむ 憂しと見し世ぞ 今は恋しき

伊勢大輔
清少納言
左京大夫道雅
権中納言定頼
相模
前大僧正行尊
周防内侍
三条院
能因法師
良暹法師
大納言経信
祐子内親王家紀伊
前中納言匡房
源俊頼朝臣
藤原基俊
法性寺入道前関白太政大臣
崇徳院
源兼昌
左京大夫顯輔
待賢門院堀河
後徳大寺左大臣
道因法師
皇太后宮大夫俊成
藤原清韓朝臣

は 行

はなさそふ
はなのいろは
はるすぎで
はるのよの
ひさかたの
ひとはいさ
ひとをし
ふくからに
ほととぎす

96
9
2
67
33
35
99
22
81

ま 行

みかきもり
みかのほら
みせばやな
みちのくの
みよしのの
むらさめの
めぐりあひて
ももしきや
もろともに

49
27
90
14
94
87
57
100
66

や 行

やすらはで
やへむぐら
やまがはに
やまざとは
ゆふされば
ゆらのとを
よのなかは
よのなかよ

59
47
32
28
71
46
93
83

85	夜もすがら もの思ふ頃は 明けやらで 闇のひまさへ つれなかりけり
86	囀りて 月やはものを 思はする かこち顔なる わが涙かな
87	村雨の 露もまだひぬ 真木の葉に 霧立ち昇る 秋の夕暮れ
88	難波江の 芦の仮寝の 一夜ゆゑ 身を尽くしてや 恋ひわたるべき
89	玉のをよ 絶えなば絶えぬ 長らへば 忍ぶることの 弱りもぞする
90	見せばやな 雄島のあまの 袖だにも 濡れにぞ濡れし 色は変はらず
91	きりぎりす 鳴くや霜夜の さ庭に 衣片敷き ひとりかも寝む
92	わが袖は しほひに見えぬ 沖の石の 人こそ知らね かわく間もなし
93	世の中は 常にもがもな 清濁ぐ あまのをぶねの つなでかなしも
94	み吉野の 山の秋風 さ夜更けて ふるさと寒く 衣打つなり
95	おほけなく うき世の民に おほふかな わが立つそまに 墨染の袖
96	花誘ふ 嵐の庭の 雪ならで 降り行くものは わが身なりけり
97	こぬ人を 松帆の浦の 夕なぎに 焼くやもしほの 身も焦がれつつ
98	風そよぐ ならの小川の 夕暮れは みそぎぞ夏の しるしなりける
99	人も愛(を)し 人も恨めし あぢきなく 世を思ふゆゑに もの思ふ身は
100	ももしきや 古き軒端の 忍ぶにも なほあまりある 昔なりけり

俊恵法師
西行法師
寂蓮法師
皇嘉門院別当
式子内親王
殷富門院大輔
後京極殿前太政大臣
二条院勘岐
鎌倉右大臣
参議藤経
前大僧正慈円
入道前太政大臣
権中納言定家
従二位家隆
後鳥羽院
順徳院

よもすがら	85
よをこめて	82
わ 行	
わがしほは	8
わがそでは	92
わすらるる	38
わすれじの	54
わたのはら	
こぎいでてみ	11
やそしまかけ	76
わびぬれば	20
をぐらやま	26

本書の特色と読み方

本書は、高校生と一般読者の為に、古典文法を踏まえ、正確に適用しながら、百人一首の和歌およびその詞書の現代語訳と解釈・鑑賞の方法について、実践的に教授することを目的としたものである。

以下、その読み方を実例を挙げながら説明する。

- ・古文は**赤茶色**、現代語訳は**黒**、解説その他は黒で印刷してある。
- ・和歌の本文は、行頭に 印を付けて示してある。その行を辿れば本文が読める。例えば**61**は、

いにしへの奈良の都の八重桜今日九重に匂ひぬるかな

と読む。

- ・和歌の本文は、| で単語に区切ってある。例えば[61]のいにしへ・の・奈良・の...はそれぞれ一単語である。
- ・稀に、一単語の中を・で区切ってあることもある。これは、接頭語・接尾語・複合動詞・語源などの理解を分かりやすくするための臨時的な説明で、例えば[1]の|かり・(い)ほ|は、単語の意味の理解を助けるため、その組成を説明したものである。
- ・掛詞は本文の下に、赤茶色の文字で示してある。例えば[8]の、宇治(山)と憂じは掛詞である。
- ・縁語・対照表現は、対応する語を〈 〉・ ・ で囲んで示している。例えば[9]の、《降る》と《長雨》は縁語であり、[61]の いにしへ と けふ は対照表現である。
- ・現代語訳は、古文の本文の下に、黒で印刷されている。「左から右へ」「上から下へ」の原則に従って読むように書いてある。これは通釈として読むことが出来る。
- ・現代語訳は、古文の単語単位の区切りに厳密に対応させて現代語訳を付け、更に補う語句を示して、その訳が成立する根拠を明示した。
- ・係助詞・間投助詞などによる強調表現で、現代語に適切な訳語がない場合、「！」で示した。試験の答案などでは、訳さなくてもよい。
- ・詞書などの古文の散文の部分も、二色刷りの部分は和歌の本文と同じ方式で現代語訳を付けた。
- ・品詞分解については、品詞名は、例えば「名詞」は「名」とした。動詞についてだけは「動詞」の表記は省略し、例えば八行四段活用は「八四」とした。六つの活用形は、「未・用・終・体・已・命」とした。
- ・句切れについては、品詞分解の欄で、句切れの部分を。と。で示し、「句切れなし」の表記は省略した。
- ・係り結びについては、品詞分解の欄で、例えば[3]のように、係り助詞の部分を、「か」「係助」で示し、結びの単語の活用形を、「む」「体」で示した。「係り結びなし」の表記は省略した。

大化の改新を断行した。663年白村江の戦いで敗北、667年近江大津の宮に遷都し、行政機構の整備に努めた。668年即位。天武天皇に暗殺されたという説がある。

品詞分解

秋 | の | 田 | の | かりほ | の | 庵 | の | 苔 | を | あら・み | わ | が | 衣手 | は | 露 | に | 濡れ | つつ
名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 形容語幹・接尾 | 代 | 格助 | 名 | 係助 | 名 | 格助 | 下二用 | 接続助

2

春 | | 過ぎ | て | 夏 | | | 来 | に | け(る) | らし | | |
春 | が | 過ぎ | て、夏 | が | | | もう |
| やって来 | た | | らしい。毎年夏になると |

白妙(しろたへ) | の | 衣 | | 乾(ほ)す | てふ | | 天(あま)の香具山 |
真白 な | 衣 | を | 乾 す | という | あの | 天 の香具山 | に今日は衣が乾してある。

参考

万葉集(巻一・28)では、持統天皇の御製として、次のような原歌がある。

春 | | 過ぎ | て | 夏 | | 来たる | らし | | | | 白妙の | 衣 | | ほし | たり | | | 天(あめ)の香具山 |
春 | が | 過ぎ | て | 夏 | が | やって来る | ことが分かる。何故なら、今日は | 真っ白な | 衣 | が | 乾し | てある。あの | 天 の香具山 | に。

作者

持統(じとう)天皇。大化元年(645)~大宝2年(702)、第41代天皇。天智天皇の皇女で天武天皇の皇后。686年の天武の死後、天武との間の子息の皇太子草壁皇子の即位を実現するまでの中継のため即位し、同母姉の大田皇女の子の大津皇子を自害に追い込んだが、草壁皇子は689年に病死。草壁の子文武天皇の即位まで自らが皇位を維持し天武系の皇統を守った。694年、藤原京に遷都。藤原京は710年の奈良遷都まで16年間維持された。

品詞分解・句切れ

春 | 過ぎ | て | 夏 | 来 | に | け(る) | らし 。白妙 | の | 衣 | ほす | てふ | 天の香具山
名 | ガ上二用 | 格助 | 名 | 力変用 | 助動完了用 | 助動過去体 | 助動推定終。 | 名 | 格助 | 名 | サ四終 | 八四体 | 名

夏来にけらし 「けらし」は「けるらし」の短縮形。「ける」は過去・詠嘆の助動詞。「らし」は奈良時代までは根拠を示して推定する意味で使われた。参考にあげた原歌ではその意味で使われているが、平安時代には、本来の意味で使われたかどうかは、分からない。
衣ほすてふ 「てふ」は「と言ふ」の短縮形。発音は「チヨウ」^[4]
天の香具山 耳成山・畝傍山と並んで、大和三山の一つ。標高152メートル。万葉集では「あめのかぐやま」と読んでいる。
出典
新古今集・巻三・夏・175

3

足曳(あしび)き | の | 山鳥 | の | 尾 | の | しだり 尾 | の |
足曳 き | の | 山鳥 | の | 尾 | の | 垂れ下がった尾 | のように |

長 々 し | 夜 | を | 一 人 | | か | も | 寝 | | む |
長い長い | この夜 | を、私一人 | で | | 寝る | のだろう | か | なあ。

作者
柿本人麻呂(かきのもとのひとまる) 生没年未詳。持統・文武両天皇に仕えた宮廷歌人。万葉集の中で最高の歌人とされる。古今集仮名序に、紀貫之の「柿本人麿なむ、歌の仙(ひじり)なりける」との評言がある。

品詞分解・係り結び

足曳き | の | 山鳥 | の | 尾 | の | しだり尾 | の | 長々し | 夜 | を | 一人 | か | も | 寝 | | む
名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 形容シク終 | 名 | 格助 | 名 | 係助 | 係助 | ナ下二未 | 助動助量体

4

| 田子(たご)の浦 | に | うち出 | て | 見れ | | ば | 白妙(しろたへ) | の |
見晴らしの良い | 田子 の浦 | に | 出 | て、見渡す | と、真っ白 な |

富士 | の | 高 嶺 | に | 雪 | は | 降り | つつ
富士 | の | 高い嶺 | に | 雪 | が | 降り | 続けている。

作者
山部赤人(やまべのあかひと) 生没年未詳。元明・元正・聖武天皇の頃の宮廷歌人。叙景歌に優れ、万葉集第二の歌人とされる。古今集仮名序に「人麿は赤人が上に立たむこと難く、赤人は人麿が下に立たむこと難くなむ、ありける」とある。

のは同音反復。
足曳きの山鳥の尾のしだり尾
のは長々し夜以下を呼び出すための序詞(じょことば)。
足曳きの「山」に掛かる枕詞。

長々し夜 形容詞の終止形に名詞を付ける言い方があった。他にも諸説がある。「長し」はク活用だが、「長々し」はシク活用。客観的な形容詞はク活用、主観的な形容詞はシク活用である。

出典
拾遺集・卷十三・恋三・778

田子の浦 静岡県富士市の海岸。「田子」は農夫の意。
見れば 已然形+接続助詞
「ば」は確定条件を表し、「...ので」「...ところ」「...と」などと訳す。

雪は降りつつ 「つつ」は継続・反復を表す接続助詞。

出典
新古今集・卷六・冬・675

1. 助詞の理解と訳し方

古文読解のために、助動詞については多くの参考書が用法、訳し方などについて詳しく説明していますが、助詞については、詳しい説明はほとんど見かけません。しかし、助詞の理解はきわめて大切です。なぜなら、助詞は語句の文中における「格」を明示して構文を決めたり、文の種類（その文が平叙文か疑問文か感嘆文かなど）を決めるものだからです。また、助詞は語句の接続を明示することによって、文脈を決定するものでもあります。ここでは、難しい理論は避けて、百人一首の実例に即して、実際にどう理解し、どう訳したらよいかをまとめて見ましょう。

まず、助詞はどういう場合が難しいか。結論から言うと、次のような順序で使われている所が要注意です。自立語の後に先ず、**格助詞**の入る仕切りが一つあり、その後に**係助詞**または**副助詞**の入る仕切りが幾つかある。「幾つか」とは、0～3くらいと考えて下さい。図示すると、次のようになります。

自立語 | **格助詞** | **係助詞**または**副助詞** | **係助詞**または**副助詞** | ...

具体例を示せば、

- 34

たれ | を | か | も | 知る人にせむ | | |
 | **格助詞** | **係助詞** | **係助詞** |
 だれ | を | | | 知る人と思おう | か | なあ

「を」はそのまま訳し、「か」「も」は後ろにもって行って、疑問・詠嘆に訳している。

もの | を | こそ | 思へ 49・80
 | **格助詞** | **係助詞** |
 もの | を | ! | 思う

「を」はそのまま訳し、「こそ」は強めと理解する。

注意すべきは、次のように、一見、格助詞が使われていないように見える場合です。

春 | | 過ぎて [2]
| 格助詞 |
春 | が | 過ぎて、

主格を示す「が」は古語にはないので、「春」と「過ぎて」の間の空白が「春」が主格であることを示している。だから、空白を現代語の「が」に訳す。空白に格助詞が隠れている、ということを知ることが大切です。

もみぢ | | 踏み 分け [5]
| 格助詞 |
紅葉 | を | 踏んで分け入り、

空白に内在する対象を示す「を」を現代語には補っています。「を」は古語では使われたり省略されたりします。古語の現代語訳の時、補うことが多いのは「を・に・の・は・が」です。

秋風 | | ぞ | 吹く [71]
| 格助詞 | 係助詞 |
秋風 | が | ! | 吹く。

空白を[2]と同じく「が」に訳し、「ぞ」を強めと理解する。「秋風ぞ吹く」を訳せば、「秋風が吹く」である。しかし、「ぞ」を「が」に訳しているのではなく、「が」は補い、「ぞ」は強めと理解しているのです。

逢坂の関 | | は | 許さじ [62]
| 格助詞 | 係助詞 |

逢坂の関 | を | ! | 許すつもりはありませんよ。
逢坂の関 | | は | 許すつもりはありませんよ。

...古語の空白に内在する「を」を現代語の「を」に訳し、「は」を強めと理解する。

...空白を訳さず、係助詞「は」はそのまま現代語の副助詞「は」に訳す。古語の係助詞と現代語の副助詞は、係り結びの用法が違うだけで、本質的には同じものと考えてよい。

忘らるる身 | を | ば | | | 思はず 38
| 格助詞 | 係助詞 |
身 | を | ! | 惜しく | は | 思いません。
身 | | は | 惜しく (は) | 思いません。

...古語の「を」を現代語の「を」に訳し、「は」を強めと理解する。

...古語の「を」を訳さず、係助詞「は」はそのまま現代語の副助詞「は」に訳す。「ば」は係助詞の「は」が発音上濁音化(連濁)しただけのもの。

- 3・91
| ひとり | | か | も | 寝 | む | | |
| 格助詞 | 係助詞 | 係助詞 |
私は、ひとり | で | | | 寝る | のだろう | か | なあ。

空白を数量を表す「で」と訳し、「か」「も」は後ろにもって行って、疑問・詠嘆に訳している。

もっと分かりにくい例について考えてみましょう。

1. 雄島のあまの袖 | | だに | も | 濡れにぞ濡れし... 90

2. ×雄島のあまの袖 | が | だに | も | 濡れにぞ濡れし...

| 格助詞 | 副助詞 | 係助詞 |

1. 雄島の漁師の袖 | | さえ | も 、 濡れに 濡れ...

2. ×雄島の漁師の袖 | が | さえ | も 、 濡れに 濡れ...

印は古語でそういう言い方がある、×印は、ない、

印は現代語でそういう言い方がある、×印はない、という意味です。

主格を示す格助詞「が」は古語にはないが、「雄島のあまの袖」が主語、「濡れにぞ濡れし」が述語だから、「が」が空欄に内在していると考えられる。現代語でも、「が」が内在しているが、「袖がさえも」とは言わず、「袖さえも」と言う。

3. 夢 | に | だに | 返らぬ | ものを... (謡曲『葵の上』)

4. x夢 | | だに | 返らぬ | ものを...

| 格助詞 | 副助詞 |

3. 夢 | に・で | さえ | 返らない | のに...

4. x夢 | | さえ | 返らない | のに...

格助詞の「に」を「に・で」と訳し、「だに」を「さえ」と訳している。現代語では「夢にさえ返らない」とも「夢でさえ返らない」とも言うので、「に」の現代語訳は「に・で」となる。しかし、「夢さえ返らない」とは言わない。つまり、「に」または「で」は省略できない。

5. かく | | と | だに | えやは伊吹(言ふ)の... [51]

6. xかく | | だに | えやは伊吹(言ふ)の...

| 格助詞 | 副助詞 |

5. あなたが好きです | と | さえ、 ... 言う...

6. xあなたが好きです | | さえ、 ... 言う...

引用の格助詞の「と」を「と」と訳し、「だに」を「さえ」と訳している。「あなたが好きですとさえ」とは言うが、「あなたが好きですさえ」とは言わない。つまり、「と」は省略できない。

7. 文字 | を | だに | 書けず。

8. 文字 | | だに | 書けず。

| 格助詞 | 副助詞 |

7. 文字 | を | さえ | 書けない。

8. 文字 | | さえ | 書けない。

格助詞の「を」は訳しても訳さなくてもよい。つまり、「を」は省略してもしなくてもよい。

以上の考察から、助詞の種類と用法について、取りあえず次の定義が得られたので、記録しておきます。

古文・現代文を問わず、日本語の助詞は、次の三種類に分類することが出来ます。

- 1．叙述する対象に対する話し手の空間的な認識を論理的に表現する…格助詞
- 2．叙述する対象に対する話し手の時間的な認識を論理的に表現する…接続助詞
- 3．話し手の聞き手に対する主観的態度を表出する…係助詞・副助詞・終助詞・間投助詞

結論：助詞の訳し方のポイントは、自立語の後ろや、係助詞や副助詞の前に隠れている格助詞を補うことである。

終助詞・間投助詞については説明しませんでした、訳し方は難しい所はありません。

三笠の山 | に | 出で | し | | | | | 月 | | | | | か・も
三笠の山 | に | 出 | た、私の記憶にある、あの月と同じ月 | であるの | か・なあ。

作者

安倍（正しくは「安倍」）仲麿。大宝元年（701）～宝亀元年（770）。

鑑賞

作者は奈良時代中期の官吏だったが、17歳ころ遣唐留学生として渡唐し、約三十年間を玄宗皇帝治下の中国で過ごした。その間、李白・王維などの詩人とも親交があった。何度か帰国を試みたが失敗し、中国で没した。この歌が詠まれた事情は、古今集の歌の左注に次のように記されている。

この歌は昔、仲麿を、唐土に物習はしに遣はしたりけるに、数多（あまた）の年を
この歌は昔、仲麿を、中国に学問を習わせに派遣したのだが、長い年月を

経て、え | 帰り | まうで来(こ) | ざり | ける | を、この国 | より | 又 | 使ひ | | 罷り | |
経ても、 | 日本に | |
 | 帰って | 来る | |
 | ことが出来 | | なかつた | が、日本 | から | 別の | 遣唐使 | が | 日本から中国に |

至りけるに | たくひ | て、まうで来(き) | な | ん | と | | て | 出で立ち | ける | に、明州(みんしゅう) | と | 言ふ |
行つた | のに | 同行し | て、日本に | ぜひ |
 | 帰って来(こ) | | よう | と | し | て | 出 | 発し | た | 時に、明州 | | と | いう |

所 | の | 海辺 | にて、か | の | 国 | の | 人、饞別(むまのはなむけ) | | し | けり。夜 | に | なり | て、月 | の |
所 | の | 海辺 | で、そ | の | 国 | の | 人が | 送別の宴会 | | を | し | てくれた。夜 | に | なっ | て、月 | が |

いと | 面白 | さし出で | たり | ける | を | 見 | て、 | 詠 | め | る | と | なむ | 語り伝ふる | | 。
たいそう | 美しく | 昇っ | て | い | た | のを | 見 | て、歌を | 詠ん | だ | と | ネット | 語り伝える | 話である。

品詞分解

動詞「なり」で「存在」を表すと説明されるが、「に | ある」の短縮形と考えると分かりやすい。

三笠の山 現在の奈良公園の若草山。

出でし月 「し」は、三笠の山の上に出た月がはっきりと記憶に残っている意。

左注 その歌の左（後）に、その歌が詠まれた事情を説明した文章。

まうで来ざりけるを・まうで来なんとて 「まうでこ」「まうでき」の終止形は「まうで来(く)」で、謙遜語。この場合は、詞書の書き手の、(天皇のいる)日本に対する敬意が表現されている。 [60]

まかり至りけるに 「まかり」は謙遜語。詞書の書き手の、(天皇のいる)日本に対する敬意が表現されている。

[43・53・55・63・71]

明州 現在の寧波市。

月のいと面白く この月は、満月の頃。満月は日没の頃、東の地平線に昇り、夜半に南

天の原|ふりさけ| 見れ | ば |春日| なる |三笠の山| に |出で | し |月|かも
名 |カ下二用|マ上一已|接続助| 名 |助動存在体| 名 |格助|ダ下二|助動回想過去体|名|終助

8

わ|が| 庵(いほ)|は|都|の|辰巳 |しか |ぞ| |住む
私|の|草庵 |は、都|の|東南の宇治で、このように|! |気楽に|住んでいます。

世 |を|宇治(うぢ)山| |と| 人|は| |言ふ |なり
|憂じ |
世の中|を|厭だと思って |
|宇治 山|に暮らしている|と|世間の人|は|私のことを|言っている|そうですが。

作者

喜撰法師。生没年未祥。伝未祥。この一首だけが喜撰の歌として確認されている。

鑑賞

自分は「気楽に暮らしている」のに、世間の人「世を厭だと思って暮らしていると噂しているそうだ」という対照的な表現が面白い。

品詞分解・句切れ・係り結び

わ|が|庵|は|都|の|辰巳|しか|ぞ|住む。世|を|宇治山|と|人|は|言ふ|なり
代名|格助|名|係助|名|格助|名|副|係助|マ四体。名|格助|名|格助|名|係助|八四終|助動伝聞推定終

9

花|の|色|は|うつり|に|けり|な
桜の花|の|色|は|色あせ|てしまっ|たことだ|なあ、そして、
私|の|容色|も、衰え|てしまっ|たことだ|なあ。

の空高く輝く。

詠めるとなむ 「なむ」は係
助詞 35

出典

古今集・巻九・羈旅・406

宇治山 現在の宇治市東方の
喜撰山。

宇治(山)と憂じは掛詞(か
けことば)。「憂じ」は「憂ず」
(サ変動詞)の連用形とも、
「憂し」(形容詞)の終止形と
も説明できる。

当時、「ぢ」と「じ」の発音が
同じだったかどうかは、諸説
ある。

出典

古今集・巻十八・雑下・983

鑑賞

この歌がいかにか巧みにリズムカルに作られているかは、歌の中に使われている動詞に注目するとよく分かる。

「行く」と「帰る」、「別れる」と「逢ふ」、「知る」と「知らぬ」は対句であり、日常的にもっともよく使われる言葉でもある。そのような対照的な語を積みかけるように次々と繰り返し、係助詞の「も」と「は」を繰り返し使って連結することによって、「逢坂の関」を行き交う人々の個々の姿を、また全体の情景をイメージとして描出していると言える。「逢坂の関」は太古から都と東国を結ぶ交通の要所であり、出会いと別れの悲喜劇が演じられる舞台でもあった。

作者

蝉丸。生没年未詳。伝未詳。盲目の琵琶法師だったという伝説があり、平曲を語る中世の盲僧琵琶の祖とも言われる。この歌の詞書に「**相坂の関に庵室を作りて住み侍りけるに、行き交ふ人を見て**（後撰集・巻十五・雑一・1089）」とあり、また、逢坂の関の近くに「関蝉丸神社」が残っている所から、関の近くに住んでいたことは事実と思われる。

品詞分解

これ | や | こ | の | 行く | も | 帰る | も | 別れ | て | は | 知る | も | 知ら | ぬ | も | 逢坂の関
代名 | 係助 | 代名 | 格助 | カ四体 | 係助 | ラ四体 | 係助 | ラ下二用 | 接続助 | 係助 | ラ四体 | 係助 | ラ四末 | 助動 | 打消体 | 係助 | 名

11

| わたの原 | | 八十・島(やそしま) | | かけ | て |
流罪となって隠岐に渡る途中、大海原 | の中を、沢山の・島々 | を | 目がけ | て、

| 漕ぎ・出で | ぬ | と | 人 | に | は | 告げよ | 海人(あま) | の | 釣り舟 |
| 今、
舟を | 漕ぎ・出し | た | と、都の人たち | に | は | 伝えてくれ、漁師 | たち | の | 釣り舟 | よ。

作者

参議(小野)篁。延暦21(802)~仁寿(じんじゅ)2年(852)、嵯峨天皇の朝臣。遣唐副使に任命されたが乗船を拒否し、遣唐使の事業を風刺する漢詩を書いて、天皇の逆鱗に触れ、838年、隠岐に流罪に処された。この歌はその時のもの。840年に罪を赦されて帰京し、以後、政権中枢にいて要職を歴任した。

一号線)にあった関所。伝承によって、現在、記念公園と石碑が作られている。

出典

後撰集・巻十五・雑一・1089

八十島かけて 現在の島根県
の美保関町千酌(ちくみ)から千酌湾に船出し、北上して日本海の隠岐諸島の島影を見た時に詠まれた歌らしい。
海人の釣り舟 海人に呼び掛けるのではなく「釣り舟」に呼び掛けることによって、遠く広がる海、その海を眼前にした自らの孤独感・疎外感を表現している。

海人 90

出典

品詞分解

わたの原 | 八十島 | かけ | て | 漕ぎ出で | ぬ | と | 人 | に | は | 告げよ | 海人 | の | 釣り舟
 名 | 名 | カ下二用 | 接続助 | ダ下二用 | 助動完了終 | 格助 | 名 | 格助 | 係助 | ガ下二命 | 名 | 格助 | 名

12

天(あま)・つ・風 | 雲 | の | 通ひ・路(ぢ) | 吹き・とぢよ
 (天・の・風)
 天上 | に吹く風よ、天女がかよってくる | 雲の中 | の | 通り道 | を | 吹き・閉ざしておくれ。
 | をとめ | の | 姿 | | しばし | | とどめ | | む |
 この天女のように美しい | 舞姫たち | の | 姿 | を、しばらくでも | 地上に | とどめておき | たい | から。

天つ風 「つ」は古い格助詞で、「の」と同じ。「沖つ白波」「天(あま)つ羽衣」などの用例がある。76

出典

古今集・巻十七・雑上・872

鑑賞

この歌は、宮中の年中行事「豊の明かりの節会(せちゑ)」の「五節(ごせち)の舞」を詠んだものである。この節会は、新嘗祭(にいなめさい)の翌日行われる「直会(なおりい)」である。新嘗祭は、その年の収穫の稲を餅や酒とともに神に捧げて感謝し、祈りを捧げる儀式。その儀式の後、天皇と臣下が神と共に餅や酒を飲食するいわば打ち上げの宴会(直会)を行った。これが「豊の明かりの節会」である。この時、公卿から二人、殿上人、受領から二人の乙女が舞姫として選ばれ、宮中の舞台で豪華な装束で舞楽の舞を舞った。これが「五節の舞」である。なお、新天皇即位後の特別の新嘗祭である大嘗祭の時には、舞姫の数は五人だった。作者遍昭は、この舞姫たちを天女に見立て、いつまでも地上にいて欲しいと願う気持ちを、ユーモアを交えて詠んだのである。「遍照(昭)は乙女になんの用がある」と後世の人はからかったが、遍照は出家しても美を愛づる心は失わなかったのである。この歌がいつの新嘗祭で詠まれたかは分からない。

作者

僧正遍昭(良岑宗貞(よしみねのむねさだ))、弘仁2年(816)~寛平(かんぴょう)2年(890)、桓武天皇の孫で、若年から仁明天皇に寵遇され、849年、蔵人頭に任ぜられたが、翌年、天皇の崩御により、悲嘆して35歳で出家した。

品詞分解・句切れ

天つ風 | 雲 | の | 通ひ路 | 吹きとぢよ。をとめ | の | 姿 | しばし | とどめ | む
 名 | 名 | 格助 | 名 | ダ上二命。名 | 格助 | 名 | 副 | マ下二未 | 助動意志終

参考

「伊勢物語」初段に、この歌を踏まえた在原業平の恋歌が記されている。

春日野の|若紫|の|すり|衣|

|忍ぶ| |の|乱れ| |限り| |知ら|れ|ず

春日野の|若紫色|の|忍ぶ刷りの私の衣|の乱れ模様のように、あなたを想い|忍ぶ|私の心|の|乱れ|は|限り|が|知ら|れ|ません。

作者

河原左大臣(源融(とある))、弘仁13年(822)~寛平7年(895)、嵯峨天皇の皇子。仁明朝、清和朝に急速に昇進し、872年に左大臣に任ぜられた。風流人として知られ、平安京の東六条に広大な四町の土地に河原院(現在の涉成園)という邸宅を造営し、庭園をみちのくの塩釜の海浜に見立てて、塩焼きの風景を楽しんだ。有名な宇治の平等院は、初めは彼の別荘であった。

品詞分解

みちのく|の|忍ぶ|擦り|誰|ゆゑ|に|乱れ|初め|に|し|我|なら|な・く|に
名|格助|名|代名|名|格助|マ下二用|助動完了用|助動回想過去体|代名|助動断定未|助動消未・接尾|接続助

15

君| |が|ため| |春|の|野|に|出(い)で|て|
あなた|に|さし上げる| |ために、まだ寒い|早春|の|野原|に|出|て|

若菜| |摘む|わ|が|衣手|に|雪| |は|降り|つつ
若菜|を|摘んでいる|私|の|衣の袖口|に、春の雪|が|!|降り|続|ています。

作者

光孝天皇。天長7年(830)~仁和3年(887)、第58代天皇。仁明(にんみょう)天皇の第三皇子。嵯峨天皇の皇孫。884年、55歳の時、陽成天皇(清和天皇の皇子)の廃位に伴って即位し、在位3年余で崩御した。幼少から聡明で、信望があった。仁和の帝、小松の帝などと称する。

品詞分解

君|が|ため|春|の|野|に|出で|て|若菜|摘む|わ|が|衣手|に|雪|は|降り|つつ
代名|格助|名|名|格助|名|格助|ダ下二用|接続助|名|マ四体|代名|格助|名|格助|名|係助|ラ四用|接続助

擦り刷りと染めは縁語。

初めと染めは掛詞(かけことば)。

知られず 「れ」は可能。打消しや反語を伴う「る・らる」は「可能」。

出典

古今集・巻十四・恋四・724

君がため・わが衣手 「が」は連体修飾語を作る格助語。
若菜摘む 正月の最初の子の日に野に出て若菜を摘み、あつものとして食べる習慣があった。これを「根の日の遊び」と言った。後にこれが正月七日の「七草がゆ」の風習になった。

出典

古今集・巻一・春上・21

16

今、私は都のあなたと | 別れて | 任地の | 因幡 | の | 山 | の |
 | 往な | ば | 因幡 | に行くが、
 | そこに | 行ってしまった | ならば
 | 因幡 | の国 | の | 山 | の |
 峰 | に | 生(お)ふる | 松 | と | し | 聞か | ば |
 | 待つ |
 峰 | に | 生えている | 松 | という言葉のように
 | あなたが私の帰りを | 待っている | と | ! | 聞い | たならば
 今 | 帰り | 来(こ) | む
 すぐにでも | 帰って | 来る | つもりですよ。

作者

中納言(在原)行平。弘仁9年(818)~寛平5年(895)平城天皇の皇子である阿保親王の第二子で、弟業平とともに「在原」の姓を賜った。855年に因幡守に赴任した。この歌は、この任国への下向に際してのものである。2年余りで帰京した。『古今和歌集』によれば、理由は明らかではないが文徳天皇の時須磨に蟄居を余儀なくされ、当地で浜辺に流れ着いた木片から一弦琴である須磨琴を作ったと伝えられる。『源氏物語』須磨の巻のモデルとも言われる。

品詞分解

立ち別れ | 因幡 | の | 山 | の | 峰 | に | おふる | 松 | と | し | 聞か | ば | 今 | 帰り | こ | む
 ラ下二用 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 八上二体 | 名 | 格助 | 副助 | 力四未 | 接続助 | 副 | 力四用 | 力変未 | 助動意志終

17

不思議なことが多かった | ちはやぶる | 神代 | も | 聞か | ず
 | 神代 | に | も | こんなことがあったとは | 聞いたことが | ない。

立ち別れ 作者が38歳の時、因幡(鳥取県の東部)の守に赴任し、都を離れることになった。その時、親しい人々と別れを惜しみ、自己の心情を吐露した歌である。

因幡(いなば)と往なばは掛詞(かけことば)

松と待つは掛詞。

松とし聞かば「し」は強め。適当な訳語がないので、試験の答案などでは訳出しなくてもよい。

今帰り来む 実際にすぐ帰ってくることは出来ないが、そのくらい相手を想っているという自分の心を述べる詩的誇張である。

出典

古今集・巻八・離別・365

ちはやぶる 「神」に掛かる枕詞。

竜田川 | | 唐紅(からくれなゐ) | に | 水 | | 括(くくる) | と | は
竜田川が、美しい紅葉の落葉を流して、唐紅 | に | 水 | を | 絞(しば)り染めにする | と | は

作者

在原業平朝臣。天長2年(825)～元慶(がんぎょう)4年(880)、平城天皇の皇孫。在原行平の弟。『伊勢物語』の主人公に擬せられている、史上最高のプレーボーイとされる。和歌にも強烈な個性を発揮し、紀貫之は古今集仮名序で、「その心余りて、言葉足らず」と評している。

鑑賞

この時代の和歌的発想では、紅葉は美しい錦に喩えるのが一般的だったが、そういう固定観念に捉われず、紅葉が川の水を紅色に染めているという大胆で斬新な着想を採り、しかも、「神話の時代にも聞いたことがない」という詩的誇張と組み合わせたところに、作者業平の、奔放で大胆な才能が発揮されている。詞書に、竜田川の紅葉を画いた屏風絵に書き付けた歌とある。

品詞分解・句切れ

ちはやぶる | 神代 | も | 聞か | ず 。 竜田川 | 唐紅 | に | 水 | くくる | と | は
ラ四体 | 名 | 係助 | カ四末 | 助動打消終。 名 | 名 | 格助 | 名 | ラ四終 | 格助 | 係助

18

住の江 | の | 岸 | に | 寄る | | 波 | | 夜 | さへ |
住の江 | の | 岸 | に | 寄せる | | 波は | | 昼にだけでなく | 夜 | にまでも |
| 寄せては返す。そのように | 私も、人目のある昼にだけでなく | 人目のない夜 | にまでも |

や | 夢 | | の | 通ひ・路(ぢ) | | 人目 | | 避(よ)く | | らむ | |
| 夢の中 | の | 通り・道 | で、人目 | を | 避(よ)けて、あの人に逢えずに引き返して来る | のだろう | か。

作者

藤原敏行朝臣。生年未祥～延喜7年(907)、蔵人頭・近江権守・右兵衛督等を歴任。和歌や書道に優れ、「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」(古今集・巻四・秋上・169)の歌でも有名。『宇治拾遺物語』『伊勢物語』などにも和歌に関する説話が見られる。歌集に『敏行集』がある。

竜田川 69

唐紅 中国から輸入された美しい真紅の染料、またその色。誉める意味で使っている。

括る 絞り染めにするために、紐を巻きつけて締めること。

出典

古今集・巻五・秋下・294

住の江の岸に寄る波は「ヨル」の同音反復で夜さへや以下を呼び出す序詞。

住の江 大阪府住吉区住吉の海岸。

寄る・夜・避くは同音反復。

夜さへ 「さへ」は同種のものを添加する意味の副助詞

50・89。昼には人目があるから逢えないが、人目のない夜にまでも逢えない。

らむ 理由推量。人目を避ける理由を推量している。

鑑賞

岸に寄せる波は、何度も何度も空しく引き返す。私も同じように、恋人に何度逢いに行っても、夜、夢の中でさえ人目を憚って、空しく引き返す。叶わぬ恋の切ない感情が、波のイメージと重ね合わされ、流麗なリズムで歌われている。

品詞分解・係り結び

住の江 | の | 岸 | に | 寄 | 寄 | 波 | 夜 | さ | へ | や | 夢 | の | 通 | 通 | 路 | 人 | 目 | 避 | 避 | く | ら | む
 名 | 格助 | 名 | 格助 | ラ四体 | 名 | 名 | 副助 | 係助 | 名 | 格助 | 名 | 名 | 名 | カ下二終 | 助動原因理由推量体

19

難波潟(なにはがた) | 短 | 短 | き | 芦 | の | 《節(ふし)》 | の | 間(ま) | も
 難波潟 | に | 生 | 生 | える | あ | の | 芦 | の | 節 | と | 節 | と | の | 間 | の | よ | よ | う | な | も
 | 短 | 短 | い | | | | | 時 | 時 | 間 | | | も、

| 逢 | 逢 | は | で | こ | の | 世 | を | 過 | 過 | ぐ | し | て | よ | と | や | (言 | 言 | ふ) | |
 《節(よ)》

あなたと | 逢 | 逢 | わ | 不 | 不 | い | で、こ | の | 一 | 一 | 生 | を | 過 | 過 | ぐ | し | て | し | ま | え | と、 | 私 | 私 | に | 仰 | 仰 | る | の | だ | す | か。

作者

伊勢。元慶元年(877)~天慶2年(939)伊勢守藤原継蔭の娘だったので「伊勢」と呼ばれた。才色共に優れ、多くの男性から愛されたとする。宇多天皇の後温子(おんし)の女官となったが、天皇の皇子敦慶(あつよし)親王の寵を受け、歌人中務(なかつかさ)を生んだ。歌は典型的な古今調で、優美な恋愛歌に優れている。

文法

「...と|係助詞。」の後には、たいがい「言ふ・言ひける」などが省略されている。なぜなら、現代でも、「...と」の後には「言う」が使われることが多い。使われることが多い言葉は、言わなくても分かるからこそ、省略されるのである。

難波潟短き芦の節の間もは逢
 はで以下を呼び出す序詞。

短き芦 「短き」は「間」に
 掛かると解釈すべきである。

節(よ) 芦や竹の節(ふし)
 と節(ふし)の間の空洞を「よ」

と言う。適当な漢字がないの
 で「節」と書くこともある。

そこで、世(よ)と節(よ)

は掛詞(かけことば)

節(ふし)と節(よ)は縁語。

難波潟 20・88

とや 「と」の後に一番多く
 使われる言葉は「言ふ」なの

で、省略されることが多い。

63・86

出典

新古今集・巻十一・恋一・1049

品詞分解

難波_名 短_{形容ク体} 芦_名 の_{格助} 節_名 の_{格助} 間_名 も_{格助} 逢_{係助} は_{四末} で_{接続助} こ_{代名} の_{格助} 世_名 を_{格助} 過_{サ四用} ぐし_{助動完了} て_{格助} よ_{係助} と_{格助} や

20

あなたと逢えず、私は | 侘(わ)び | ぬれ | ば | 今 | はた | | 同じ
あなたと逢えず、私は | 悲嘆に暮れ | てしまった | ので、今は | もう | どうなっても | 同じです。だから、

《難波(なには)》 | なる | 身 | を | 尽くし | て | も | | 逢は | む | と | ぞ | 思ふ
〔に・ある〕 《濤標(みをつくし)》
難波江 | に・ある | 濤標ではないが、
| わが身 | を | 捨て | て | も | あなたに | 逢い | たい | と | | 思います。

作者

元良親王。寛平2年(890)~天慶6(943)、陽成天皇の第一皇子。平安朝きつてのプレーボーイと言われ、多くの女性と恋歌を交わした。「元良親王御集」があり、女性との贈答歌が大部分を占めている。この作品を詠みかけた相手は、宇多上皇が愛した女性だったと言う。

品詞分解・句切れ・係り結び

侘_{バ上二用} び_{助動完了} | ぬ_{接続助} れ_副 | ば_副 | 今_{形容シク終} | は_名 | た_名 | | 同_{助動存在} じ_{格助} 。 難波_{サ四用} | なる_{係助} | 身_{八四末} | を_{助動意志終} | 尽_{格助} | く_{係助} | し_{格助} | て_{係助} | も_{格助} | 逢_{係助} | は_{係助} | ん_{係助} | と_{係助} | ぞ_{係助} | 思_{係助} | ふ_{係助}

21

今 | 来(こ) | む | と | | 言 | ひ | し | ばかり | に |
今すぐ | (来る) | |
| 行く | つもりだよ | と | あなたが | 言ってよこし | た | ばかり | に、私はそれを真に受けて、

濤標 「水脈(みを)つ串」の意で、舟の安全な航路を示すために海中に立てた杭のこと。

身を尽くしと濤標は掛詞。

難波と濤標は縁語。

難波 現在の大阪府の海岸のことで、桂川、木津川、宇治川などが集まって淀川となり、大きな水郷を形成していた。難波江・難波潟などと言う。芦や濤標などが歌によく詠まれる。 19・88

出典

後撰集・卷十三・恋五・960

今来む 実際は相手が、「行くつもりだよ」と言ったのだが、それを作者の立場から「来るつもりだよ」と表現している。

|長 月|の|有明 |の|月 |を|待ち ・出(い)で |つる |かな
 夜の|長い |
 |長 月|の、明け方|の|月|が| ・出る の|
 |を|待ち明かし・ |てしまった|ことですよ。

作者

素性法師(良岑玄利(よしみねのはるとし))、生没年未詳。僧正遍昭が俗人だった時の子。『大鏡』の舞台として有名な雲林院に住んでいたことがある。この歌は、女性の立場に立って詠んだ歌である。

参考 有明の月

旧暦では「文月・葉月・長月」が秋の七・八・九月で、秋の末である長月は夜の長い月と発想された。有明の月はその月の終わりの頃、27日前後の月。夜明け前に東の空に現れ、月輪の下側が弓なりに光っている。 30・31・81

品詞分解

今|こ | む |と|言ひ | し |ばかり|に|長月|の|有明|の|月|を|待ちいで| つる | かな
 副|カ変未|助動意志終|格助|八四用|助動回想過去体| 副 |格助|名|格助|名|格助|名|格助|ダ下二用|助動完了体|終助詠嘆

22

吹く| からに|秋|の|草木|の|しをるれ | ば |
 吹く|とともに、秋|の|草木|が|萎(しお)れる|ので、

むべ |山 風|を| | 嵐 | |と|言ふ|らむ
 | 荒らし|
 なるほど、山から吹き下ろす風|を| | (風が)荒らい、つまり|
 |山+風=嵐 | |と|言う|のであろう。

現代でも「あいつはここに来るって言っていたよ」などと言うのと同じ。 25

言ひしばかりに 「し」は、そのことをはっきり憶えているという意味を表す。

有明の月 参考

待ち出でつるかな 長々と待っていたが、出て来たのはあなたではなく有明の月だったという落胆の気持ちが入められている。

出典

古今集・巻十四・恋四・691

嵐と荒らしは掛詞(かけことば)。「嵐」は名詞、「荒らし」は形容詞の終止形。

嵐 ものを吹き散らす強い風。 96

作者

文屋康秀(ふんやのやすひで)、生没年未祥。伝記未祥。下級貴族だったらしい。六歌仙の一人で、古今集仮名序に次のように評されている。「言葉は巧みにて、そのさま身に負はず。いはば商人(あきびと)のよき衣(きぬ)着たらむがごとし。」

品詞分解

吹く | からに | 秋 | の | 草木 | の | しをるれ | ば | むべ | 山風 | を | 嵐 | と | 言ふ | らむ
 カ四体 | 接続助 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | ラ下二已 | 接続助 | 副 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 八四終 | 助動原因理由推量終

23

月 | | 見れ | ば | 千々(ちぢ)に | もの | こそ | 悲しけれ
 《千》

月 | を | 見る | と、あれこれと | 限りなく | もの | ! | 悲しくなることだ、

わ | が | 身 | 《一つ》 | の | 秋 | に | は | あら | ね | ど
 私 | | 一人 | | だけに訪れた | 秋 | で | は | ない | | とは思う | けれど。

作者

大江千里(ちさと)、生没年未祥。阿保親王(平城天皇の皇子)の孫で漢学者の大江音人(おとんど)の子。漢学者の家柄で、和漢の文学に博学有能で知られていた。

品詞分解・句切れ・係り結び

月 | 見れ | ば | 千々に | もの | こそ | 悲しけれ。わ | が | 身 | 一つ | の | 秋 | に | は | あら | ね | ど
 名 | マ上一已 | 接続助 | 形容動ナリ用 | 名 | 係助 | 形容シク已。代名 | 格助 | 名 | 名 | 格助 | 名 | 助動断定用 | 係助 | ラ変未 | 助動消已 | 接続助

らむ 理由推量。山風を嵐と
 言う理由を推量している。

18・27・33

出典

古今集・巻五・秋下・249

月 この月は、歌意から見て、満月だろう。

千々に・一つの 千々と千(ち)を掛詞(かけことば)とし、千(ち)と一つを縁語とする。通説は、むしろ漢詩の対句の発想を和歌に応用したものとする。この表現は、白楽天の「燕子楼中霜月の夜秋来たりて只だ一人の為に長し」(白氏文集・巻十五)を踏まえている。

ものこそ悲しけれ 「こそ」は強め。試験の答案などでは訳出しなくてよい。

秋にはあらねど 「こんなに悲しいのは私だけだろうか」という余情を込めている。

出典

古今集・巻四・秋上・193

24

こ | の | 度(たび) | は | 幣(ぬさ) | も | | 取りあへ | ず | | 手向け山 |
 | 旅 | | | | とりあへ | ず |
 こ の | 度 | の | |
 | 旅 | | は、急な事で、幣 | も | 用意が | 間に合い | ません。そこで、
 | とりあえ | ず、 | この | 手向け山の |

| もみぢ | の | 錦 | | 神 | の | まにまに |
 美しい | 紅葉 | の | 錦 | を代わりにお供えいたします。どうぞ、神のみ心 | の | ま まに | お受け取り下さい。

作者

管家(菅原道真) 承和12年(845)~延喜3年(903) 宇多天皇に学識を信任され、醍醐朝で右大臣にまで昇進したが、藤原時平らのそねみを受け、901年、無実の罪で太宰府に配流され、その地で没。没後、都に様々な災厄が起こり、管家の怨霊の祟りであるという噂が広まり、鎮魂のため天満宮に神として祀られた。これが現在学問の神とされる天神様である。

詞書

朱雀院 | の、奈良 | に | おはしまし | たり | ける | 時 | に、手向け山 | にて、詠み | ける | 。
 朱雀院(宇多天皇) | が、奈良 | に | 行幸され | た | 時 | に、手向け山 | で、詠ん | だ | 歌。

品詞分解・句切れ

こ | の | たび | は | ぬさ | も | 取りあへ | ず | 。手向け山 | もみぢ | の | 錦 | 神 | の | まにまに
 代名 | 格助 | 名 | 係助 | 名 | 係助 | 八下二未 | 助動 | 下終。 | 名 | 名 | 格助 | 名 | 名 | 格助 | 副

25

| 名 | に | し | 負は | ば | 逢(あふ)坂山 | の | さね 葛(かづら) |
 | 逢 | ぶ | | 寝 | 寝る | | 寝る | | という |
 その | 名 | に | ! | | もし | |
 | 責任を負う | ならば、逢 | 坂山 | の | さね 葛 | | よ、

度(たび)と旅は掛詞。
 取りあへずととりあへず(副詞)は掛詞。
 取りあへず 「ず」は終止形で、句切れは二句切れと考える。
 手向け山 道の神に供え物をして通る山。
 錦 69
 出典
 古今集・巻九・羈旅・420

逢坂山と逢ふは掛詞(かけこ
 とば)。
 逢坂山 10
 さね葛 つる草の一種。
 さね葛とさ寝は掛詞。さ寝の

人 | に | 知 | ら | れ | で | | | 来 | る | よ | し | | | も | が | な
 繰 | る
 人 | に | 知 | ら | れ | ない | で、 蔓 (つる) を | | 手 | 繰 | る | よ | う | に、
 | あ | な | た | の | 元 | に | (来 | る)
 | 行 | く | | 手 | 段 | が、 あ | れ | ば | よ | い | の | に | あ | あ。

作者
 三条右大臣（藤原定方）、貞観15（873）～承平2（932）、京都三条に邸宅があるのでこう呼ばれた。宇多・醍醐の両朝に仕え、政治家として要職を歴任した。その一方、文化人としても、和歌・管絃に堪能で知られた。

品詞分解
 名 | に | し | 負 | は | ば | 逢 | 坂 | 山 | の | さ | ね | 葛 | 人 | に | 知 | ら | れ | で | 来 | る | よ | し | も | が | な
 名 | 格 | 助 | 副 | 助 | 八 | 四 | 末 | 接 | 続 | 助 | 名 | 格 | 助 | 名 | 名 | 格 | 助 | ラ | 四 | 末 | 助 | 動 | 受 | 身 | 未 | 接 | 続 | 助 | カ | 変 | 体 | 名 | 終 | 助 | 希 | 望

26

小 | 倉 | 山 | | 峰 | の | も | み | ぢ | 葉 | | | 心 | | あ | ら | | ば |
 小 | 倉 | 山 | の | 峰 | の | 紅 | 葉 | の | 葉 | よ、 お | 前 | に | | も | し | |
 | 風 | 雅 | を | 解 | する | 心 | が | あ | る | なら | ば、
 今 | | ひ | と | た | び | の | み | ゆ | き | | | 待 | た | | な | む
 も | う | | 一 | 度 | の | 行 | 幸 | を | 迎 | える | ま | で、 美 | し | く | 紅 | 葉 | し | た | ま | ま、 散 | ら | ず | に | 待 | っ | て | い | て | く | れ | よ。

詞書
 亭子院、大井河に御幸（ごこう）ありて、「 | 行幸（みゆき）もありぬべき | 所なり」と
 宇多上皇が | 大井河に御幸 | なさって、「醍醐天皇の | 行幸 | もあってよさそうなほど、紅葉のすばらしい所だ」と
 仰せ給ふに、「事よし | 奏せ | ん」と申し | て | 。
 仰せになったので、「上皇のご意向を天皇に | 奏上 | いたしましう」と申し上げて、詠んだ歌。

「さ」は接頭語で、さ寝は「寝ること」。

逢ふとさ寝は縁語。

来ると繰るは掛詞。

さね葛は蔓（つる）を繰（く）るので、繰ると縁語。

人に知られて「...に～る・らる」の形で使われる「る・らる」は受身である。 38

77

来る 作者が「行く」ののだが、相手の立場になって「来る」と言っている。 21

出典

後撰集・巻十一・恋三・700

小倉山 京都府左京区嵯峨の、大井川（桂川）の北岸にある山。対岸に嵐山がある。紅葉の名所として名高い。

今ひとたびのみゆき この歌は亭子院（宇多天皇）が大堰川（おほゐがは・現在の桂川）に行幸された時、小倉山の美しい紅葉をご覧になって、我が子の醍醐天皇にも見せたいと仰せられたのを、お供をしていた作者が詠んで奉ったものである。907年9月10,11

作者

貞信公(藤原忠平) 元慶4(880)~天曆3(949) 別称、小一条太政大臣。関白太政大臣藤原基経の四男。909年に兄時平が39歳で早世した後、朝政を司り、延喜の治と呼ばれる政治改革を行い、また菅原道真の名誉回復に尽力した。朱雀朝で摂政、関白を歴任し、村上朝の初期まで長く政権を維持した。寛大で慈愛が深かったため、その死を惜しまぬ者はなかったという。

品詞分解

小倉山|峰|の|もみぢ葉|心|あら|ば|今|ひとたび|の|みゆき|待た|なむ
名|名|格助|名|名|ラ変末|接続助|副|名|格助|名|タ四末|終助願望

27

みかの原| | 分き|て|流るる|いづみ川|
《湧き》 《泉》

みかの原|を|二つに分け|て|流れる|泉川、その「いづみ」ではないが、

|いつ|見|き| |と| |て|か| |恋|し|か|る| |らむ|
[恋しく・ある]

あなたを|いつ|逢|い|見|た|から|と|い|う|わ|け|で| |こ|ん|な|に|恋|し|く|思|っ|て|い|る|の|だ|ろ|う|か|
いや、逢い見たわけでもないのに、なぜか、こんなに恋しく思っているのです。

作者

中納言(藤原)兼輔 元慶元年(877)~承平3年(933) 加茂川堤に邸宅があったので堤中納言とも呼ばれた。従兄弟で妻の父であった藤原定方とともに当時の歌壇の中心的人物であり、紀貫之や凡河内躬恒などの後援者でもあった。

文法

「らむ」は現在推量(36)と同時に、現在目の前に起きている現象の裏にあるはずの、目に見えない原因・理由を推量する意味を表す。この歌の場合は、恋しく思っていることの原因・理由を想像している。18・22・33

日の御幸、行幸の際の詠作かという。

出典

拾遺集・巻十七・雑秋・1128

みかの原分きて流るるいづみ川はいつ見きとてか以下を呼び出す序詞。

みかの原 京都府笠置町のいづみ川の北一帯の原。

いづみ川 現在の木津川のこと。

分きと湧きは掛詞(かけことば)。

湧きと泉は縁語。

いづみといつ見は同音反復。

か(疑問の係助詞)は、文末に「(だろう・でしょう)か」と訳す。

らむ 文法

いづみ川 三句切れという説もある。

出典

品詞分解・係り結び

みかの原 | 分き | て | 流るる | いづみ川 | いつ | 見 | き | と | て | か | 恋しかる | らむ
 名 | カ四用 | 接続助 | ラ下二体 | 名 | 副 | マ上一用 | 助動回想過去終 | 格助 | 接続助 | 係助 | 形容シク体 | 助動原因理由推量体

28

山里 | は | 冬 | ぞ | さびしさ | まさ | り | ける |
 山里 | で | は | 冬 | に | こそ | 寂しさ | が | 暮(つの)る | ことだ。
 | は | 冬 | が | 特に |

人 | 目 | も | 草 | も | 離(か)れ | ぬ | と | 思へ | ば
 | 枯 | れ |
 人の訪れ | も | 途絶え、
 | 草 | も | 枯 | れ | てしまう | と | 思う | ので。

作者

源宗于(むねゆき)朝臣。生年未詳~天慶2(939)。光孝天皇の孫にあたる。臣籍に降下し源氏となったが官職に恵まれず、宇多天皇に自分の不遇を嘆く歌を奏上した話が「大和物語」に見える。

品詞分解・句切れ・係り結び

山里 | は | 冬 | ぞ | さびしさ | まさ | り | ける。人目 | も | 草 | も | かれ | ぬ | と | 思へ | ば
 名 | 係助 | 名 | 係助 | 名 | ラ四用 | 助動詠嘆体。名 | 係助 | 名 | 係助 | ラ下二用 | 助動完了終 | 格助 | 八四已 | 接続助

29

| 心あて | に | 折(を)ら | ば | や | 折ら | む |
 これが白菊の花かと、あて推量 | で、折 | る | ならば | | 折る | う | か。庭一面に白く |

離れと枯れは掛詞。

離れぬ 「ぬ」は打消しの「ず」の連体形ではない。連体形なら、次に体言(名詞)があるはずである。

出典

古今集・卷六・冬・315

初霜 | の | 置き |

| 惑は せ | る | 白菊 | の | 花 |
[惑はし | ある]

初霜 | が | 置いて、どれが白菊が分からなくして | 私を | 戸惑わ せ | ている、その白菊 | の | 花 | を。

作者

凡河内躬恒。生没年未詳。下級貴族だったらしいが、作歌の才能は群を抜いており、紀貫之と並び称される古今集時代の代表歌人。勅撰集に収められている歌は約 190 首もある。

鑑賞

秋の深い庭園の植え込みに白菊の花が咲いているが、ある朝、霜が一面に降りて、白菊の花も葉も覆ってしまった。霜も白、白菊も白だから、白菊の花がどこにあるか、分からなくなってしまった。折るならば、あて推量で折るしかないのであろうか。理屈っぽいようであるが、白菊の花の美しさと、それへの愛着を、理知的な詩的誇張によって上品で繊細に表現しているのである。

品詞分解・句切れ・係り結び

心あて | に | 折ら | ば | や | 折ら | む 。初霜 | の | 置き | 惑はせ | る | 白菊 | の | 花
名 | 格助 | ラ四未 | 接続助 | 係助 | ラ四未 | 助動推量体。名 | 格助 | カ四用 | サ四已 | 助動存続体 | 名 | 格助 | 名

30

有明 | の | | つれなく | | 見え | | し | |
有明の月 | が | 明け行く空に | 無関心に白く残っているように | 見え、そして |
あなた | が | 私に対し て | | しらじらしく薄情に | 見え | | たことが忘れられない |

| 別れ | より | | あかつき | ばかり | 憂き | もの | は | なし
あの朝の | 別れ | 以来、私にとって、 暁 | ほど | つらい | もの | は、 ない。

作者

壬生忠岑(みぶのただみね) 生没年未詳。壬生只見の父。下級貴族だったが歌に優れており、紀貫之、凡河内躬恒らと並ぶ平安朝初期の代表的歌人。

鑑賞

惑はせる 「惑はせ」はサ行四段「惑はす」という動詞の已然形。「惑はす」はバ行四段「惑ふ」の他動詞形、つまり別の語である。

出典

古今集・巻五・秋下・277

有明 有明の月のこと 鑑賞
見えし 「し」は回想過去で、そのことをはっきり記憶していることを表す。

出典

古今集・巻十三・恋三・625

「有明」とは、有明の月のこと。夜明け近く太陽より先に東の空に現れ、月輪の下側の三分の一くらいが黄色く光っている。この月は空が明か
るくなくても消えず、白い月となって空に残る。21・31・81 明け方はまた、男女の別れの時刻でもある。この歌はちょうど空が明るくなる刻
限の月の風情と、別れる恋人の表情を同時に詠み込んだ歌である。明るくなって行く空に無関係に白けて残る月。同様に、別れる男に無関心な態
度で送り出す白けた愛人の表情。作者はそれを思い出すたびに、舌打ちしたくなるほど憎らしかっただろう。平安朝の和歌らしからぬ、リアリズム
の心理表現さえ読み取れる。

品詞分解

有明 | の | つれなく | 見え | し | 別れ | より | あかつき | ばかり | 憂き | もの | は | なし
名 | 格助 | 形容ク用 | ヤ下二用 | 助動回想過去体 | 名 | 格助 | 名 | 副助 | 形容ク体 | 名 | 係助 | 形容ク終

31

朝ぼらけ | 有明 | の | 月 | と | 見る | まで | に |
朝がほのぼのと明けてくる頃、明け方 | の | 月の光か | と | 見間違える | ほど | に | 明かるく、

吉野 | の | 里 | に | 降り | する | 白雪 |
〔降り | ある〕
吉野 | の | 里 | に | 降り積もっ | ている | 白雪 | であることよ。

鑑賞

第一句・第二句の頭韻、第三句・第四句の脚韻、第二句の字余り、結句の体言止めなどの技巧を自然な形で取り入れ、冬
の山里の静寂、寒気、一面に広がる雪景色を一幅の絵のように、絵画的に描き出している。

文法

完了・存続の助動詞「り」はなぜ命令形（已然形）に接続するのか。

「降り | する | 白雪」は、本来は「降り | ある | 白雪」(hururu 白雪)でしたが、ia e と音韻変化して、「hururu 白雪」
(降り | する | 白雪)となりました。従ってこの「降り」は、命令形や已然形の意味を持っているわけではありません。同じ
ことはサ変動詞にも当てはまります。例えば「練習せ | する | 時」なら、本来は「練習し | ある | 時」(練習 siaru 時)でし
たが、ia e と音韻変化して、「練習 seru 時」(練習せ | する | 時)となりました。この「練習せ」も、未然形の意味を持
っているわけではありません。「り」がラ変に活用するのも、「あり」から出来たという成立事情を知ると、当然とうなづけま

有明の月 21・30・81 この
歌は、実際に有明の月が出て
いるのではなく、出ているか
と見間違えるほど雪が明るく
光っている情景を詠んでい
る。

朝ぼらけと有明は頭韻。
までにと里には脚韻。

吉野の里 奈良県吉野郡の人
里。

朝ぼらけ 初句切れという説
もある。

出典
古今集・巻六・冬・332

す。ただし、古典文法では、「り」は四段動詞の命令形か已然形・サ変動詞の命令形から接続する、などと説明されています。

作者

坂上是則(さかのうえのこれのり)、生年未詳～延長8年(930)、坂上田村麿の四代の孫。下級貴族。古今集以下に39首が採歌されている。歌風は古今調の特色を反映して理知的傾向が強く、写実的な実感を伴った自然な歌が多い。

品詞分解

朝ほらけ|有明|の|月|と|見る|まで|に|吉野|の|里|に|降れ|る|白雪
名|名|格助|名|格助|マ上一体|副助|格助|名|格助|名|格助|ラ四已|助動存续体|名

32

山 川(やまがは)|に|風|の|掛け|たる| |しがらみ| は|
山の谷川 |に|風|が|掛け渡し|た|美しい|しがらみ|かと思ってよく見ると、それは

|流れ| |も|あへ|ぬ|もみぢ| |なり|けり
[|に|あり|]
川面にたまって|流れること|も|出来|ない|紅葉の落葉|なので・あつ|たなあ。

しがらみ 川の水をせき止める為に、杭を打ち並べ、竹や木の枝を絡ませたもの。

出典

古今集・巻五・秋下・303

作者

春道列樹(はるみちのつらき)、生年未詳～延喜20年(920)、身分の低い官吏だったらしいが、「昨日と言ひ今日と暮らして明日香川流れて早き月日なりけり」(古今集・巻六・冬・341)という歳末の気持ちを詠んだ歌が名歌として知られている。

文法

「なり|けり」を語源に戻すと、「に|あり|けり」である。「に」は断定の助動詞の連用形。この形に係助詞を入れると、「に|ぞ|あり|ける」「に|こそ|あり|けれ」などの言い方になるが、この場合の「に」も同じく断定の助動詞の連用形。こういう「あり|けり」の「けり」は「発見詠嘆」の意味を表す。そのことに気が付いて、深く感動する意である。定石=「ありけり」は発見詠嘆。 100

品詞分解

山川に|風|の|掛け|たる|しがらみ|は|流れ|も|あへ|ぬ|もみぢ|なり|けり
名|格助|名|格助|カ下二用|助動完了体| 名 |係助|ラ下二用|係助|八下二未|助動消体| 名 |助動断定用|助動詠嘆終

33

ひさかた|の|光| |のどけき|春|の|日|に|
こんなに| |日|の|光|が| |のどかな|春|の|日|に、

しづ|心|なく|花|の|散る|らむ|
 | |なぜ|
落ちていた心も|なく|桜の花|が| |散り急いで|いるのだろうか。
 | |は|

作者

紀友則。生没年未詳。紀貫之のいとこで、和歌の道では貫之の先輩にあたる。古今集の撰者だったが、完成を見ずに死去した。古今集に46首入集している。

品詞分解

ひさかた|の|光|のどけき|春|の|日|に|しづ心|なく|花|の|散る|らむ
名 |格助|名|形容ク体|名|格助|名|格助| 名 |形容ク用|名|格助|ラ四終|助動原因理由推量体

34

たれ|を|か|も|知る|人|に|せ| |む|
年老いた私は、いったい|誰|を| | |知り合い|と|思っ|たらよい|の|だろう|か|なあ。

ひさかたの 「光・日・月・空」などに掛かる枕詞。

花の は格助詞「の」を「が」と訳している。 は「の」を訳さず、「は」を補っている。花の散るらむ 「らむ」は原因・理由を推定する意味を表す。眼の前に見える「花が散る」という現象の裏にあって眼に見えない、その現象が現れる原因・理由を想像する意である。 18・22・27

出典

古今集・巻二・春下・84

たれをかも 「を」は格助詞で、「たれ|を|...|せむ」という格関係を表す。「か」は疑

|高砂|の|松|も| |昔| の|友| なら | なく| に
[に・・あら] [ぬ・あく]

長寿で知られる、あの|高砂|の|松|も、私の|昔|からの|友|で・は|な い・こと|なのに。

作者

藤原興風(おきかぜ) 生没年未祥。「寛平御時后宮歌合」や「貞子院歌合」などに参加している。「歌経標式」の著者。古今集以下に38首。

鑑賞

老境の孤独を、実感に即して詠んだ歌である。長生きすることはうれしいことである反面、親しい人が次々となくなってしまう。高砂の松は昔から見慣れていて、松は長生きだというが、まさか松の木を古い友達だと思ふ訳にもいかないしなあという、実感を伴った深い嘆息の表現であろう。

品詞分解・句切れ・係り結び

たれ|を|か|も|知る|人|に|せ|む。高砂|の|松|も|昔|の|友| なら | な ・ く | に
代名|格助|係助|係助|ラ四体|名|格助|サ変未|助動推量体。名|格助|名|係助|名|格助|名|助動断定未|助動打消未・接尾|接続助

35

人 |は|いさ |心 |も|知ら |ず| |ふる さと| |は|
人間|は、さあ、どうでしょう、心がどう変わるか|は|知り|ません。けれど、昔なじみのこの里 |で|は、

花|ぞ|昔|の | 香(か)|に|句(にほ)ひ | | ける
梅の花|は|昔|と同じ|よい香り |で|匂っ て、私を迎えてくれる|ことですよ。

作者

紀貫之。貞観10年(868)~天慶8年(945)、先祖は武内宿禰と言われる。環境に恵まれ、早くから漢学、和歌の教養を身につけた。古今集の撰者で、当代一流の代表的歌人である。古今集以下に441首がある。「土佐日記」の作者でもある。

詞書

問の係助詞「も」は詠嘆の係助詞。係助詞や副助詞は、複数が一緒に使われることがある。 3

知る人にせむ 「せ」は「す」。 「す・ものす・あり」は、文脈で柔軟に訳す。 53・65

高砂 兵庫県高砂市。
高砂の松 長寿の象徴として歌に詠まれる。

友ならなくに 最近の説によれば「友|なら|ぬ|あく|に」の短縮形。「ぬ」は打消し「ず」の連体形。「あく」は「こと」という意味の名詞。

出典
古今集・巻十七・雑上・909

初瀬 | に | 詣(まう)づる | ごと | に | 宿り | ける | 人 | の | 家 | に | 久しく | 宿ら | 前 | で、
以前、長谷寺 | に | 参詣する | 度 | に | 泊めてもらっ | ていた | 人 | の | 家 | に | 久しく | 泊まら | ないで、

至れ | り | けれ | ば | 、か | の | 家 | の | 主(あるじ) | 、'かく | 定かに | なむ | 宿り | は |
久しぶりに | 訪ねて行っ | た | ところ、そ | の | 家 | の | 主人 | が、'この通り | しっかりと | ネット | 宿 | は |

ある | 」と、 | 言ひ出(い)だし | て | 侍り | けれ | ば、そこ | に | 立て | り | ける |
あなたを待って | いますよ。』と、いやみを | 言って来 | ました | ので、そこ | に | 立っ | てい | た |

梅(むめ) | の | 花 | を | 折(を)り | て、詠め | る | 。
梅 | の | 花 | を | 折っ | て、詠ん | だ | 歌

鑑賞

この歌は、一首を「人」と「花ぞ」の対比で捉えるのが、鑑賞の根幹である。作者が長い間ご無沙汰したことに対して主人がいやみを言い、作者がそれに対して軽妙に言い返したものだが、このやりとりは、風雅をわきまえた貴人同士の、親しみのこもった挨拶である。「人はいさ」の「人」は主人のことだけでなく、作者も含めた人間一般を指している。また、「心も知らず」の「心」も同様である。「人間というものは、お互い、心のほどは移ろいやすく、確かなものではない、その点が悲しいものですが…」という人間の存在への作者の感慨が表出されている。それが、「しかし、梅の花は変わらない、そこが羨ましいですね」というように、変わらない自然に対比されている。作者と宿の主人は、無常と恒常を対比させつつ、機知に富んだ応答を楽しんでいるのである。

品詞分解・句切れ・係り結び

人 | は | いさ | 心 | も | 知ら | ず | 。ふるさと | は | 花 | ぞ | 昔 | の | 香 | に | 匂ひ | ける
名 | 係助 | 副 | 名 | 係助 | ラ四末 | 助動打消終。 名 | 係助 | 名 | 係助 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 八四用 | 助動詠和嘆体

36

夏 | の | 夜 | は | まだ | 宵(よひ) | | ながら | 明け | ぬる | | を |
夏 | の | 夜 | は、まだ | 宵の口 | (| のまま) |
| だと思っているうちに | 明け | てしまう | ほど短い | ので、
月 | は | 夜のうちに | 西の山 | まで | たどり着けない |

初瀬 74

なむ(なん) 係助詠詞。話し手が聴き手に対して、親しく「...ネット」と語りかける言葉。物語の地の文などでも使われる。なぜなら、物語はその名の通り、もともと作者が読者に物語る形式から生まれたものだからだ。口語的な言葉なので、和歌の本文にはほとんど使われない。

出典

古今集・巻一・春上・42

宵ながら明けぬる 直訳なら、「宵の口のまま明けてしまおう。夏の夜が短い事を誇張した表現。

月 ここで詠まれている月は

品詞分解・係り結び

白露 | に | 風 | の | 吹きしく | 秋 | の | 野 | は | 貴き | 止め | ぬ | 玉 | ぞ | 散り | ける
名 | 格助 | 名 | 格助 | カ四体 | 名 | 格助 | 名 | 係助 | カ四用 | マ下二末 | 助動形消体 | 名 | 係助 | ラ四用 | 助動形嘆体

38

忘ら | るる | 身 | を | ば | | | 思は | ず |
あなたに | 忘れ | られる | わが身 | を | ! | 惜しく | は | 思い | ません。それよりあなたが私への愛を |
| わが身 | | は | 惜しく (は) 思い | ません。

誓ひ | て | し | | |
| 確かに |
神に | 誓っ | | たことを私は憶えています。その誓いを破ったためにあなたが神罰で命を失うと思うと、

| 人 | の | 命 | の | | 惜しく | も | ある | かな
その | あなた | の | 命の方 | が | わが身より | 惜しく | ! | 思われる | ことですよ。

作者

右近。生没年未詳。醍醐天皇の後継子(おんし)の女官で、父の官名から右近と呼ばれた。

品詞分解・句切れ

忘ら | るる | 身 | を | ば | 思は | ず | 。
ラ四末 | 助動受身体 | 名 | 格助 | 係助 | ハ四末 | 助動形消終。

誓ひ | て | | し | | 人 | の | 命 | の | 惜しく | も | ある | かな
ハ四用 | 助動強意用 | 助動回想過去体 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 形容シク用 | 係助 | ラ変体 | 終助詠嘆

忘らるる 「あなたに」などの語が省略されている「るる」は受身である。 25・77

をば ・ の訳し方がある。

62

誓ひてし 「て」は確述・確認の「つ」の連用形で、「確かにそうだった」の意。「し」は回想過去「き」の連体形で、「そのことをはっきり記憶している」という意味を表す。

41・75・90

出典

拾遺集・卷十四・恋四・870

浅(あさ)茅(ぢ) 生(ふ) | の | 小 野 | の | 篠(しの) 原 | | |
 低い 茅(ちがや)の生えている | | 小さな野 | の | 篠竹の生えている原!、恋心を |

忍ぶれ | | ど | | あまり | て | など | か | 人 | の | | 恋しき |
 こらえている | けれど、こらえる力を | 上回っ | て、どうして、 | あの人 | が | こんなに | 恋しい | のだろうか。

作者

参議(源)等。元慶(げんぎょう)4年(880)~天曆(てんりやく)5年(951)、嵯峨天皇の孫の中納言源希(みなもとのまれ)の第二子。947年参議となり、951年に72歳で没した。

品詞分解・係り結び

浅茅生 | の | 小野 | の | 篠原 | 忍ぶれ | ど | あまり | て | など | か | 人 | の | 恋しき
 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 接続助 | 四用 | 接続助 | 副 | 係助 | 名 | 格助 | 形容シク体

忍ぶれ | | ど | 色 | に | 出(い)で | に | けり | わ | が | 恋 | は |
 こらえて隠していた | けれど、 | | 私 | の | 恋心 | は |
 | とうとう |
 | 顔色 | に | 出 | | てしまっ | たことよ。

| もの | | や | 思ふ | | と | 人 | の | 問ふ | まで |
 (もの | を | | 思っている | のですか)
 「あなたは | 恋 | に | 悩んでいる | のですか」と | 人 | が | 怪しみ尋ねる | ほど | はっきりと。

作者

平兼盛。生年未祥~正暦元年(990)、光孝天皇の曾孫篤行王の子。従五位下、駿河守。

浅茅生の小野の篠原は忍ぶれど以下を呼び出すための序詞。

浅茅生 荒れ果てた土地に生えている雑草のイメージで使われることが多い。同様のものに、「八重葎」⁴⁷、「さしも草」⁵²、「させも草」⁷⁵、蓬生(よもぎふ)などがある。

篠と忍は同音反復。

出典

後撰集・巻九・恋一・577

色に出でにけり 二句と三句が倒置されているので、形式は二句切れである。

出典

拾遺集・巻十一・恋一・622

ものや思ふ ⁴³・⁴⁸・⁸⁰・⁸⁵・⁸⁶・⁸⁹

参考

この歌と、次の壬生忠見の歌は、天徳四年（960）に村上天皇・左大臣藤原実頼以下が参列して宮中で行われた歌合わせで、左右から提出されて優劣を競った。両方とも優れた歌なので、判者の実頼は優劣を決められず天皇の顔色をうかがったが、天皇も裁断を下せず、ただ「忍ぶれど」とつぶやくだけだった。実頼はこれを頼りにこの歌を勝ちとした。自分の歌を負けとされた忠見はこれを苦にして病にかかり、ついに息を引き取ったという伝説もある。

品詞分解・句切れ・係り結び

忍ぶれ | ど | 色 | に | いで | に | けり。わ | が | 恋 | は | もの | や | 思ふ | と | 人 | の | 問ふ | まで
 八上二已 | 接続助 | 名 | 格助 | 夕下二用 | 助動完了用 | 助動態和嘆終。代名 | 格助 | 名 | 係助 | 名 | 係助 | 八四体 | 格助 | 名 | 格助 | 八四体 | 副助

41

恋(こひ)す | て ぶ | わ | が | 名 | は | まだき | 立ち | に | けり |
 [と・言ふ]

恋を | している | と・いう | 私 | の | 噂 | は、早くも | 立っ | てしまっ | たことよ。

人 | | 知れ | ず | | こそ | | 思ひそめ | | しか |
 人 | には | 知られ | ないように、 ! | そつとあなたを | 恋しはじめ | た | ばかりだったのに。

作者

壬生忠見。生没年未詳。古今集の撰者壬生忠岑の子。六位を授けられた下級貴族。

品詞分解・句切れ・係り結び

恋す | て ぶ | わ | が | 名 | は | まだき | 立ち | に | けり。人 | 知れ | ず | こそ | 思ひそめ | しか
 サ変終 | 八四体 | 代名 | 格助 | 名 | 係助 | 副 | 夕四用 | 助動完了用 | 助動態和嘆終。名 | 夕下二未 | 助動打消用 | 係助 | 夕下二用 | 助動回想過去已

恋すてぶ 「てぶ」は「と言ふ」の短縮形。発音は「チョウ」 2

しか 回想過去の助動態詞「き」の已然形。 38・75・90

人知れず 「には」を補っている。補う助詞は「をにのはが」と憶えるといふ。

出典

拾遺集・巻十一・恋一・621

作者

権中納言（藤原）敦忠。左大臣藤原時平の三男。和歌だけでなく、琵琶の名手でもあった。

詞書

はじめて|女|の|もと|に| まかり |て、 |また|の|朝|に| |つかはし|ける|。
初 めて|女|の| 家 |に|訪ねて参りまし|て、一夜を過ごした| 次 |の|朝|に、女の所に| 贈っ |た |歌。

品詞分解

逢ひ見 | て | の | のち | の | 心 | に | 比ぶれ | ば | 昔 | は | もの | を | 思は | ざり | けり
マ上一用|接続助|格助| 名 |格助|名|格助|バ下二已|接続助|名|係助| 名 |格助|ハ四未|助動丁消用|助動詠嘆

詞書 ことばがき・歌の詠まれた事情を説明する前書。この詞書は「拾遺集」が成立する前のこの歌の原稿の詞書である。

まかりて 「まかり」は謙讓語。この場合は作者敦忠の読者（貴族や皇族たち）に対する敬意が表現されている。

7・53・55・63・71

出典

拾遺集・巻十二・恋二・710

44

|逢(あ)ふ |こと|の|絶え て|し|なく | は|
あなたと|逢って一夜を共にする|こと|が| |もし| |
|まったく|!|なかつ|たならば、

|なかなか|人 |を|も| 身|を|も|恨み | ざら|まし
【ず・あら】

こんなに|中途半端に、あなた|を|も、わが身|を|も、恨むことは|な かつ|ただろうに。
一夜を共にしたために、かえって、両方を恨んで後悔するような結果になってしまいました。

作者

中納言（藤原）朝忠。延喜10年(910)～康保3年(966)、三条右大臣藤原定方の五男。

なかなか 中途半端な気持ちでしたために、こんなことをしなければよかったと後で後悔するような結果になる、という意味の副詞。この歌の場合は恋心の切なさを強調する詩的歪曲で、後悔しているだけではなく、喜んでみいる

品詞分解

逢ふ | 事 | の | 絶えて | し | なく | は | なかなか | 人 | を | も | 身 | を | も | 恨み | ざら | まし
 八四体 | 名 | 格助 | 副 | 間投助 | 形容ク用 | 係助 | 形容動ナリ用 | 名 | 格助 | 係助 | 名 | 格助 | 係助 | マ上二 | 助動形消未 | 助動反実仮想終

のであろう。

恨みざらまし 「まし」は反実仮想（現実起きたことと反対のことを空想すること）を表す助動語。

出典

拾遺集・巻十一・恋一・678

45

恋に破れて悲嘆に暮れている私を「あはれ、かわいそうに」とも言ってくれるはずの人は

誰一人として、いるとは思われず、

身 | の | いたづらに | なり | ぬ | べき | かな
 わが身 | が | 今にも |
 | むなしく | 死ん | でしまい | そうに | 思われる | ことよ。

あはれ 本居宣長によると、「ああ」「はれ」などと同じ感動詞だという。よきにつけ悪しきに付け、物事に深く感動した時に思わず発する言葉。「ああ…だなあ」と訳すが、「…」は文脈によって適切な形容語を当て嵌めるとよい。

べき 68・88

身のいたづらに 「の」と「が」を入れ替えると、うまく訳せることが多い。

出典

拾遺集・巻十五・恋五・950

作者

謙徳公(藤原伊尹(これただ))。延長2(924)~天禄3(972)。九条右大臣師輔の長男で太政大臣。九条右大臣師輔(もろすけ)の長男で、関白兼家(藤原道隆・道綱・道長などの父)の同母兄にあたる。娘懐子(かねこ)が花山天皇の母であったので、外戚として太政大臣となった。後撰集を撰進の時は、和歌所の別当(長官)だった。

品詞分解

あはれ | と | も | 言ふ | べき | 人 | は | 思ほえ | で | 身 | の | いたづらに | なり | ぬ | べき | かな
 感動 | 格助 | 係助 | 八四体 | 助動当然体 | 名 | 係助 | ヤ下二未 | 接続助 | 名 | 格助 | 形容動ナリ用 | ラ四用 | 助動完了終 | 助動准量体 | 終助詠嘆

由良の戸を渡る舟人(ふなびと) | 楫(かぢ) | を | 絶え |
 由良の瀬戸を漕ぎ渡って行く | 舟乗り | が | 楫 | を | 失って | 海に漂うように、

| ゆくへ | も | 知らぬ | 恋 | の | 道 | かな
 これからの | 行方 | も | わから | ない | 私の恋 | の | 道 | であることだなあ。

作者

曾禰好忠。生没年未祥。官職が丹後の掾だったので、曾丹と呼ばれた。

品詞分解

由良の戸を渡る舟人楫を絶え | ゆくへも知らぬ | 恋の道 | かな
 名 | 格助 | 名 | 格助 | ラ四体 | 名 | 名 | 格助 | ヤ下二用 | 名 | 係助 | ラ四末 | 助動打消体 | 名 | 格助 | 名 | 終助詠嘆

八重(やへ)葎(むぐら) | | 茂れ | る | 宿 | の | 寂しき(宿) | に |
 [茂り | ある]
 幾重にも 葎 | が | 生い茂っ | ている (家 | で、寂しい | 家) | に、
 | | | 寂しい |
 | この家 | | | に、

人 | こそ | | 見え | | ね | | 秋 | は | | 来 | に | | けり
 人 | は | 誰も | 訪(たず)ねて来 | ない | が、それでも、秋だけ | は | 訪ねて | 来 | た | ことだなあ。

作者

恵慶(えぎょう)法師。生没年未祥。平安中期の人。

由良の戸を渡る舟人楫を絶えはゆくへも知らぬ以下を呼び出すための序詞。

由良の戸 「由良」は京都府の若狭湾の丹後由良あたり。

「戸」は瀬戸、海峡、川口。

楫(かぢ) 水を掻いて舟を進める道具一般。櫓(ろ)や櫂(かい)など。櫓は舟の船尾に付けて魚の尾のように動かす。櫂(かひ)は棒の半ばから下を平たく削り、魚の胸びれのように動かす。オール。

出典

新古今集・卷十一・恋一・1071

八重葎 荒れ果てた土地に生えている雑草のイメージで使われることが多い。同じようなものに、「浅茅生」³⁹、「さしも草」⁵²、「させも草」⁷⁶、「蓬生(よもぎふ)」などがある。

茂れる宿 「宿」は源融の遺邸河原院を詠んだもの。

宿の寂しき 「の」は同格を表す格助詞。「宿」と「寂しき

(宿)が同じものであることを表し、「で」と訳す。

出典

拾遺集・巻三・秋・140

文法

「人こそ見えね」の「こそ」は、多くのものの中で、そのことだけが他と違う事を強張する語である。現代語で「オレこそ天才だ」と言うと、「他のやつらは凡人ばかりだ」という意味を言外に含んでいる。つまり、「オレは天才だ。しかし、他のやつらは凡人ばかりだ」というのと同じである。これを現代語訳する時、「しかし」という接続助詞がその前後の文の内容を対照しているため、「こそ」ではなく「は」を使っても自然な表現になる。古文も同じで、「... | こそ | ~ (已然形)」の形は、「... | は | ~だ、しかし、それ以外のものはその反対だ」というように訳せる。

品詞分解・係り結び

八重律 | 茂れ | る | 宿 | の | 寂しき | に | 人 | **こそ** | 見え | **ね** | 秋 | は | 来 | に | けり
名 | ラ四已 | 助動存续体 | 名 | 格助 | 形容シク体 | 格助 | 名 | **係助** | ヤ下二未 | 助動游了消已 | 名 | 係助 | 力変用 | 助動完了用 | 助動詠嘆終

48

風 | を | | | **甚(いた)・み** |
風 | が | **あまりにも** | **激しい** | **・** | **ので**、

岩 | | **打つ** | **《波》** | の | | **おのれ** | の **み** | | | **砕け** | | | **て** |
| | | | | | | | | **《砕け》** |
岩 | を | **打つ** | **波** | が | | | | | **砕ける** |
| | **ように**、 **私一人** | **だけ** | が、 **身も** | **砕ける** | **ほど** **思い乱れ** | **て**、

もの | を | **思ふ** | **頃** | | | **かな**
恋 | に | **悩む** | **この頃** | **である** | **こと** **だなあ**。

作者

源重之。生年未祥~長保(ちょうほう)2年(1000)清和天皇の皇子貞元親王の孫。

品詞分解

風 | を | いた・み | 岩 | 打つ | 波 | の | おのれ | のみ | 砕け | て | もの | を | 思ふ | 頃 | かな
名 | 格助 | 形容語幹・接尾 | 名 | タ四体 | 名 | 格助 | 代名 | 副助 | 力下二用 | 接続助 | 名 | 格助 | 八四体 | 名 | 終助詠嘆

風を甚み岩打つ波のおのれのみは**砕けて**以下を呼び出すための**序詞**。

波と砕けは**縁語**。単に「波が砕ける」という時は縁語ではない。この場合は「波が砕けるように、身が砕ける」というように、「砕け」が比喻によって二重の意味で使われているので、「波」と「砕け」が縁語となる。「プールに飛び込む」と言うと縁語は存在しないが、「自信はなかったが、水泳部に飛び込んだ」と言うと、「水泳部」と「飛び込む」は縁語となる。

出典

詞花集・巻七・恋上・211

御 垣 守 (みかきもり) | 衛士 (ゑし) | の | 焚く | 火 | の |
 内裏 (だいり) の 諸門 を 守 る | 兵士 | の | 焚く | かがり火 | の ように、

夜 (よる) | は | 燃え |
 夜 | は | 赤々と燃えあがり、

昼 | は | 消え | つつ | 物 | を | こそ | 思へ |
 昼 | は | 消え入るほど悩み | ながら、(物 | を | ! | 思う)
 | 恋の物思い | に | 沈む | 私であることよ。

作者

大中臣能直 (おおなかとみのよしのぶ) 朝臣。延喜 21 (921) ~ 正暦 2 (991) 後撰集の撰者。伊勢神宮の祭主でもあった。

品詞分解・係り結び

御垣守り | 衛士 | の | 焚く | 火 | の | 夜 | は | 燃え | 昼 | は | 消え | つつ | 物 | を | こそ | 思へ
 名 | 名 | 格助 | カ四体 | 名 | 格助 | 名 | 係助 | ヤ下二用 | 名 | 係助 | ヤ下二用 | 接続助 | 名 | 格助 | 係助 | 八四已

| 君 | が | ため | | | 惜 (を) し か ら | ざ り | し |
 [惜 し く ・ あ ら ず ・ あ り]
 | 惜 し く ・ な く ・ あ っ | た |
 | 惜 し く ・ な か っ | た |
 恋をして、あなた | の | ため | には | 捨てても | 惜 し く ・ な い ・ と 思 っ | て いた |

命 | さへ | | 長く | もがな | と | 思ひ | ける | かな
 私の命 | まで | が、恋が叶った今は、長く | あってほしい | と | 思う | ようになった | ことですよ。

作者

御垣守り衛士の焚く火のは夜は燃え以下を呼び出すための序詞。

御垣守り 「垣」は内裏・大内裏の垣根、つまり築地(ついで)・土塀のこと。御垣守りはその内裏・大内裏の築地と諸門を警護した。

衛士 宮中を守るため諸国から集められた兵士。一年ごとに交替した。

出典

詞花集・巻七・恋上・225

惜しからざりし 「し」は回想過去で、そのことをはつきり憶えているという意味を表す。

命さへ 「さへ」は同種ものを添加する意味の副助詞。

「捨てるのは惜しい命」は「長くあってほしい」が、恋が叶った今は「捨てても惜しくなかった命」まで、「長くあって

藤原義孝。天曆8年(954)~天延2(974)、謙徳公(伊尹)の四男。藤原行成の父。

品詞分解

君 | が | ため | 惜しから | ざり | し | 命 | さへ | 長く | もがな | と | 思ひ | ける | かな
代名 | 格助 | 名 | 形容シク未 | 助動并打消 | 助動回想過去体 | 名 | 副助 | 形容ク用 | 終助希望 | 格助 | 八四用 | 助動加詠嘆体 | 終助詠嘆

51

かく | と | だに | え | や | は | 伊吹 | の |
あなたが好きです | と | さえ | 言葉 | に出す |
| ことが出来る | でしょうか | !、いや、出来ません。
| まして、 | その | 伊吹 | の |

さしも草 | さ | し | も | 知ら | じ | な |
さしも草 | ではないが、これほど | 激しいと | ! | も | あなたは | 分かってくれ | ないでしょう | ね、

《燃ゆる》 | 思ひ | を
《火》
私のこの | 燃える | 火 | のような |
| 恋の | 思い | を。

作者

藤原実方朝臣。生年未祥~長徳4年(998)、宮中の殿上の小庭で藤原行成と争い、その冠を地に投げ捨てた罪を咎められて陸奥守に左遷され、任地で没した。そのことが伝説となり、謡曲『阿古屋』などになっている。

品詞分解・句切れ

かく | と | だに | え | や | は | 伊吹 | の | さしも草 | さ | し | も | 知ら | じ | な 。 燃ゆる | 思ひ | を
副 | 格助 | 副助 | 副 | 係助 | 係助 | 名 | 格助 | 名 | 副 | 間投助 | 係助 | ラ四未 | 助動并打消推量終 | 終助詠嘆、ヤ下二体 | 名 | 格助

ほしい」ことに付け加えられたのである。 18・85

出典

後拾遺集・巻十二・恋二・669

だに 軽いものを挙げてそれより重いものを類推させる。この場合は「好きです」と言葉に出すことが出来ないことを挙げて、激しい恋の思いを知らせることが出来ないことを類推させている。 65・90

えやは 「え」(可能)と「やは」(反語)を足して、不可能。伊吹 滋賀・岐阜県境の伊吹山。

さしもは同音反復。

さしも草 蓬(よもぎ)の異名。

燃ゆると火は縁語。

出典

後拾遺集・巻十一・恋一・612

52

明け | めれ | ば | | | 暮る | | | もの | と | は |

夜が明け | てしまえ | ば、 | 必ずまた | 日は | 暮れる、

夜が明け | てあなたと別れても、必ずまた | 日が | 暮ればあなたに逢える | もの | と | は |

知り | | ながら | | | なほ | 恨めしき | 朝ぼらけ | | | かな

知ってい | ながら、それでも | やはり | 恨めしい | 夜 | 明 | け方 | である | こと | だなあ。

作者

藤原道信朝臣。天禄3年(972)~正暦5年(994)、太政大臣藤原為光の三男。

品詞分解

明け | めれ | ば | 暮る | もの | と | は | 知り | ながら | なほ | 恨めしき | 朝ぼらけ | かな

カ下二用 | 助動完了已 | 接続助 | ラ下二体 | 名 | 格助 | 係助 | ラ四用 | 接続助 | 副 | 形容シク体 | 名 | 終助詠嘆

53

| 嘆き | つつ | | 一人 | 寝(ぬ)る | 夜 | の | 明くる | | 間(ま) | は |

あなたが訪ねて来ないのを | 嘆き | ながら、私一人で | 寝 | てる | 夜 | が | 明けるまでの | 間 | | は、

いかに | 久しき | | もの | | と | | | か | は | 知る |

どんなに | 長く感じられる | もの | か | | ということを | あなたは | | | 御存じ | でしょう | か | !

いいえ、御存じではないでしょう。門が開くのを待つ間くらい、たいした時間ではないでしょう。

作者

右大将道綱母。承平7(937)~長徳元年(995)、藤原兼家の妻。「蜻蛉日記」の作者。

詞書

明けぬれば 「ぬれ」は完了の助動詞「ぬ」の已然形。已然形に付いた「ば」は確定条件で、この場合は恒常条件で、ある条件のもとで、必ず次の事柄が成立することを表す。

「貧すれば鈍す」などの例がある。

出典

後拾遺集・卷十二・恋二・672

いかにには疑問副詞なので、文末に「か」を付けて訳す。

|入道撰政| | まかり |たり|ける| |に、門|を|遅く |開け |けれ| ば、
夫の| 藤原兼家|が| 訪ねてまいりまし| た |時|に、門|を| |開けるのが|
|遅かつ| | た |ので、

「立ち|わづらひ|ぬ| 」と|言ひ入れ|て| 侍り|けれ| ば|
「待ち|くたびれ|た|から帰る」と|伝言し |て|来まし| た |ので、歌を詠みました。

品詞分解・係り結び

嘆き|つつ|一人| める |夜|の| 明くる |間|は|いかに| 久しき |もの|と|か|は| 知る
カ四用|接続助|名|ナ下二体|名|格助|カ下二体|名|係助|副|形容シク体|名|格助|係助|係助|ラ四体

54

忘れ|じ| | |の| 行く末|まで| |は|難(かた)|けれ| ば| |
「忘れ|ないよ」と誓うあなたのお言葉|が|遠い将 来|まで|変わらないこと|は|難しい |ので、

|今日(けふ)|を|限り| の| 命| |と|もがな
そのお言葉を聞いた、今日 |を|最後|とする|私の命|であってほしい|と|願うばかりです。

作者

儀同三司(藤原伊周(これちか))の母。生年未詳~長徳2年(996)、中関白藤原道隆の妻で、儀同三司伊周、太宰卿隆家、清少納言が仕えた中宮定子を生んだ。道隆の死後、中関白家とともに没落した。

鑑賞

平安時代の貴族の婚姻形態は「通い婚」と言い、男が女のもとに通って来て、女は、ただ男の来るのを待つことしか出来なかった。また、一夫多妻が普通だったので、男が他の女に引かれて、元の妻は何の断りもなく見捨てられてしまうことも多かった。この作者も中関白藤原道隆の側室であり、三人の子をもうけたが、夫の死後、息子たちの藤原伊周・隆家が政治的に失脚、その余波で娘の中宮定子も早世し、晩年は別の意味で不

まかりたりけるに「まかり」は謙義語。この場合は、作者道綱母の読者(貴族や皇族たち)に対する敬意が表現されている。 7・43・55・63・71

侍りければ「侍り・さうらふ・おはします」などは「あり」の敬語体、つまり「ありの一族」。「ありの一族」は文脈により、自由に訳せる。

34・65

出典

拾遺集・巻十四・恋四・912

儀同三司 准大臣の唐名。伊周は大臣に准ずる職(内大臣)の待遇を受けた。

出典

新古今集・巻十三・恋三・1149

幸だった。いずれにしても、女性は自立できず、男性によって運命を支配されたのである。

品詞分解

忘れ | じ | の | 行く末 | まで | は | かたけれ | ば | 今日 | を | 限り | の | 命 | と | もがな
ラ下二末 | 助動打 | 消息志終 | 格助 | 名 | 副助 | 係助 | 形容ク已 | 接続助 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 終助希望

55

《滝》 | の | 音(おと) | は | 絶え | て | 久しく | なり | めれ | ど |
滝の水が落ちる | | 音 | は、途絶え | てから | 長い年月に | なっ | てしまった | けれど、

| 名 | こそ | 流れ | て | なほ | 聞こえ | けれ
《流れ》 | 聞こえ

その | 名声 | だけ | は | 世間に流れ | て、今なお | 語り伝えられている | ことだ。

作者

大納言(藤原)公任。康保3年(966)~長久2年(1041)漢詩、音楽、和歌に堪能だった。

詞書

大覚寺 | に | 人々 | | 数多(あまた) | まかり | たり | ける | | に、古き | 滝 | を | | 詠み | 侍り | ける。
大覚寺 | に | 人々 | が | 大勢 | | まいりまし | た | 時 | に、古い | 滝 | を | 歌に | 詠み | まし | た。

大覚寺は京都御所堀にあり、もとは嵯峨天皇の離宮があった所で、天皇はその庭に滝を落とし、滝殿を作り涼を楽しんだことで有名だったが、公任の時代にはすでに滝は枯れ、滝跡の地形だけを残していた。これが「古き滝」である。

品詞分解・係り結び

滝 | の | 音 | は | 絶え | て | 久しく | なり | めれ | ど | 名 | こそ | 流れ | て | なほ | 聞こえ | けれ
名 | 格助 | 名 | 係助 | ヤ下二用 | 接続助 | 形容シク用 | ラ四用 | 助動完了已 | 接続助 | 名 | 係助 | ラ下二用 | 接続助 | 副 | ヤ下二用 | 助動推測已

滝と絶えは同音反復。

なり・名・流れ・なほは同音反復。

流れは「滝が流れ」と「名声が流れ」の二重の意味で使われているので、滝と縁語。

聞こえは「滝の音が聞こえ」と「名声が聞こえ」の二重の意味で使われているので、音と縁語。

まかりたりけるに「まかり」は謙語。この場合は、作者公任の(仏さまのいる)大覚寺に対する敬意が表現されている。 [7]・[43]・[53]・[63]・[71]

出典

拾遺集・巻八・雑上・449

56

|あら | ざ ら|む|こ|の|世|の|ほか|の| |思ひ出| |に|
 [ず ・あら]
 私が|生きてい|ないで・ある|う|こ|の|世|の|そと|の|あの世への|思い出|にするために、
 今|ひとたび| |の| |逢ふ|こと| |もがな
 もう|一 度|だけ|の|あなたと|お逢いする|機会|が|あればと願うばかりです。

作者

和泉式部。生没年未祥。大江雅致(まさむね)の娘。一条天皇の中宮上東門院璋子(藤原道長の娘・紫式部の女主人)の女官。藤原保昌の妻。

品詞分解

あら | ざら | む | こ | の | 世 | の | ほか | の | 思ひ出 | に | 今 | ひとたび | の | 逢ふ | こと | もがな
 ラ変未 | 助動打消未 | 助動婉曲仮定体 | 代名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 副 | 名 | 格助 | 八四体 | 名 | 終助希望

57

|めぐり逢ひ |て|見 |し| | |や| それ(なり|し) |と|も|
 たまたま|雲から出たのを見|て、見 |た|もの|が| |月| だっ|た|か|と|も|
 久しぶりに|めぐり逢っ |て、話をし|た|相手|が| |あなた|だっ|た|か|と|も|
 分か |ぬ | ま | |に|
 分から|ない|短い間 |に、すぐまた|
 実感し|ない|短い対面を|ただけ|で、すぐまた|
 雲 がくれ | |に |し|夜半 |の| 月 | | |かな
 雲に隠れ |てしまっ|た|夜半 |の| 月 |のように、
 あわただしく帰っ|てしまっ|た、幼な馴染み の あなた | |であることだ|なあ。

あらざらむ 「む」は連体形で、「であろう」と訳す必要が薄く、(生きていない)「ような」とか(生きていなく)「なったら」などと訳してもよい。「む」のこういう使い方を「婉曲・仮定」と言う。 65・67

出典

後拾遺集・卷十三・恋三・763

現代語訳は の 順に読むこと。

見しや 「し」は回想過去の助動詞「き」の連体形の準体言用法で、その後「人・もの・事・時」などの適当な体言または「の」(体言の代用になる助詞)を補い、更に主格を示す格助詞「が」を補って解釈する。

作者

紫式部、生没年未詳。越後守藤原為時の娘で、藤原宣孝の妻。「源氏物語」の作者。

詞書

早く | より | 童(わらは) | 友達 | に | 侍り | ける | 人 | の | 年頃 | 経 | て |
昔 | から | 幼な | 馴染み | で | ございまし | た | 人 | が | 会わないまま | 年月 | を | 経 | て、

| 行き逢(ちが) | ひ | たる | 、 | ほのか | に | て | 、 | 七月(ふみづき) | 十日の頃
最近また | 出会っ | た | のだが、 | ちょっとしか話が | 出来ない | まま、 | 七月 | 十日の頃

月 | に | 競(きほ) | ひ | て | 帰り | 侍り | けれ | ば | 。
月 | と | 先を競う | ように | 夜半に | 帰ってしま | しまし | た | ので、 | 詠 | みました。

品詞分解

めぐり逢ひ | て | 見 | し | や | それ | と | も | 分か | ぬ | ま | に |
八四用 | 接続助 | マ上一用 | 助動回想過去体 | 係助 | 代名 | 格助 | 係助 | カ四末 | 助動打消体 | 名 | 格助 |

雲がくれ | に | し | 夜半 | の | 月 | かな
ラ下二用 | 助動完了用 | 助動回想過去体 | 名 | 格助 | 名 | 終助詠嘆

58

有馬山 | 猪名(みな) | の | 笹原 | 風 | 吹け | ば | い | で | そ | よ |
有馬山に近い | 猪名 | の | 笹原 | に | 風 | が | 吹く | と、 | 笹の葉が | そ | よ | と | 靡 | きます。
| さあ、 | その事 | です | よ、

十日の頃 旧暦の十日の月は半月より少し太っている。日没前から東の空の少し高い所に白くかかっているが、日没とともに明かるく照り、夜半前に南中し、夜半過ぎに西に沈む。

出典

新古今集・巻十六・雑上・1499

有馬山猪名の笹原風吹けばは、意味が「そよ」という風の音につづくことから、いでそよ以下を呼び出すための序詞。

私 | 人 | を | 忘れ | や | は | する |
私が | あなたを | 忘れたり | | | する | でしょう | か | !、いえ、決して忘れる事はありません。
あなたの心变りの方がよほど心配ですよ。

作者

大貳三位。生没年未祥。藤原宣孝と紫式部の娘。太宰大貳高階成章の妻。後冷泉天皇の乳母（めのと）

詞書

「かれがれなる | 男 | の、 | おぼつかなく」など | | 言ひ | たり | ける | に | 詠め | る | 。
来訪が | 途絶えがちになった | 男 | が、「あなたの心变りが | 心配です | 」など | と | 言っ | てよこした | ので、詠ん | だ | 歌。

品詞分解・係り結び

有馬山 | 猪名 | の | 笹原 | 風 | 吹け | ば | いで | そ | よ | 人 | を | 忘れ | や | は | する
名 | 名 | 格助 | 名 | 名 | カ四已 | 接続助 | 感動 | 代名 | 終助詠嘆 | 名 | 格助 | ラ下二用 | 係助 | 係助 | サ変体

59

あなた | が | 来 | ない | ので、た | め | ら | わ | ず | に | 寝 | て | し | ま | え | ば | よ | か | っ | た | の | に、今 | が | 今 | か | と | 待 | っ | て | いる | う | ち | に、
| や | す | ら | は | で | 寝 | な | ま | し | も | の | を |

さ | 夜 | | 更 | け | て | | か | た | ぶ | く | ま | で | の | 月 | を | 見 | し | かな
夜 | が | 更 | け | て、西 | に | 傾 | く | 頃 | ま | で | の | 月 | を | 見 | て | し | ま | っ | た | こ | と | で | す | よ。

作者

赤染衛門。生没年未祥。赤染時用の娘。藤原道長の娘璋子に仕え、紫式部などとも交際があった。

有馬山 兵庫県神戸市有馬温泉あたりの山の総称。

猪名 兵庫県川辺郡猪名川町の辺り。

そよ（擬音語）とそよ（代名詞+終助詞）は掛詞。

そよ 詞書の「おぼつかなく」（あなたの心变りが心配です）という男の言葉を指す。

出典

後拾遺集・卷十二・恋二・709

寝なましものを 「まし」は反実仮想を表す助重施詞。実際は起きていたのだが、寝てしまえば（よかったのに）と、現実と反対のことを空想している。 44

かたぶくまでの月 この月は十日ほどの月である。 57

中間白 藤原道隆、儀同三司

詞書

中関白、 | 少将 | に | 侍り | ける | 時 | はらから | なる | 人 | に | 物言ひ | わたり | 侍り | けり。

中関白 | がまだ | 少将 | で | ございまし | た | 時、私の | 姉妹 | にあたる | 人 | に | 求愛し | 続けて | おりまし | た。

| ため | て | 来(こ) | ざり | ける | | つとめて、女 | に | 代はり | て | 詠め | る | 。

その中関白が、来ると約束 | たのに | 来 | | なかつ | た | 夜の | 翌朝、女 | に | 代わつ | て | 詠ん | だ | 歌。

品詞分解

やすらは | で | 寝 | な | まし | ものを |

八四末 | 接続助 | ナ下二用 | 助動完了末 | 助動反実仮想体 | 接続助 |

さ夜 | 更け | て | かたぶく | まで | の | 月 | を | 見 | し | かな

名 | カ下二用 | 接続助 | カ四体 | 副助 | 格助 | 名 | 格助 | マ上一用 | 助動回想過去体 | 終助詠嘆

60

大(おほ)江山 | 生野 | | の | 道 | の | 遠(とほ)けれ | ば |

| 行く | 野 |

大 | 江山や | 生野 | を越えて、丹波まで |

| 行く、野 |

| の | 道 | が | 遠い | | ので、

まだ | | 踏み | | も | 見 | | | ず | 天(あま)の橋立

|

| 文 |

私はまだ |

|

| 天 | の橋立を |

| 踏んで | | みたこと | も | ありません。

| もちろん、母の | 手紙 | を | | 見たこと | も | ありません。

作者

小式部内侍。生年未詳～万寿2年(1025) 和泉式部の娘。上東門院彰子に仕えたが若くして没した。

(藤原伊周)の父。清少納言の女主人中宮定子の父。

少将 道隆が少将だったのは、21歳から24歳まで。その頃、すでに高階貴子という正妻があったが、亦染衛門の姉妹の許にも通っていたらしい。

ものを 終助詞と考え、二句切れとする説もある。

出典

後拾遺集・卷十二・恋二・680

大江山 京都市北西部にある山。丹後の国への道があった。

生野 京都市福知山市生野。

生野と行く野は掛詞(かけこ とば)。

天の橋立 京都市北部の宮津湾にある砂嘴(海の中に付き出て細長く延びた砂浜)。丹後の景勝地で、日本三景の一つ。

踏みと文は掛詞。

踏み(文)も見ず 「を」を補っている。補う助詞は「をにのはが」と憶えるとよい。

詞書

和泉式部 | 、保昌 | に | 具し | て | 丹後の国 | に | 侍り | ける | 頃、都 | に | 歌合(うたあはせ) | の | あり | ける | に、
和泉式部 | が、保昌 | に | 従っ | て | 丹後の国 | に | おりまし | た | 頃、都 | で | 歌合 | が | あっ | た | が

小式部内侍 | | 歌詠み | に | とら | れ | て | 侍り | ける | を、 | 中納言定頼 | | 局 | の | かつ | に |
小式部内侍 | が | 歌詠み | に | 選抜さ | れ | て | おりまし | た | が、ある日、中納言定頼 | が | 小式部の | 部屋 | の | 前 | に |

まうで来 | て、 「歌 | は | いかが | せ | させ | 給ふ | 。丹後 | へ | 人 | は | 遣はし | けむ | や。 | 使ひ | は | |
やっ | て来 | て、 「歌 | は | どう | なさいます | か。丹後 | へ | 人 | は | 送り | ました | か。丹後からの | 使ひ | は | まだ |

まうで来(こ) | ず | や。いか | に | 心もとなく | おぼす | らん | 」など、たはぶれ | て |
都 | に着きませ | ん | か。どんなに | 待ち遠しく | お思い | でしょう | か」などと、からかつ | て |

立ち | | ける | | を、引きとどめ | て | 詠め | る | 。
立ち去る | うとし | た | の | を、引きとめ | て | 詠ん | だ | 歌

品詞分解・句切れ

大江山 | 生野 | の | 道 | の | 遠けれ | ば | まだ | 踏み | も | 見 | ず | 。天の橋立
名 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 形容ク已 | 接続助 | 副 | マ四用 | 係助 | マ上一未 | 助動形消終。 名

61

いにしへ | の | 奈良 | の | 都 | の | 《八重》桜 | けふ | この辺 | に |
京 | 《九重》
旧都 | の | 奈良 | の | 都 | から帝の御前に献上された | 八重 | 桜が、今日は | こちらの |
| 京の都の | 宮中 | で、

和泉式部 作者の母。優れた歌詠みとして知られていた。

保昌 藤原。和泉式部の夫。小式部内侍の父は、橋道貞。内侍 内侍司(ないしのつかさ)の女官の総称。

歌詠み 歌合で歌を詠み、対戦者と優劣を競いあう選手。

遣はしけむや 「けむ」は過去推量の助動詞で、厳密には「ただらう」。

まうで来て 「まうでき」は謙義語。この場合は、中納言定頼の小式部内侍に対する敬意が表現されている。 7

出典

金葉集・巻九・雑上・550

いにしへとけふは対照表現。

けふと京は掛詞。

奈良と京は縁語。

この辺と九重は掛詞。

八重と九重は縁語。

いちだんと美しく | 照り映えることになっ | た | ことよ。
 | 匂ひ | | ぬる | かな

作者

伊勢大輔(たいふい) 生没年未詳。一条天皇の中宮上東門院璋子の女官。

詞書

一条院 | の | 御時、奈良 | の | 八重桜 | を | 人 | の | | 奉り | ける | を、その | 折、御前 | に |
 一条院 | が帝だった | 御代、奈良 | の | 八重桜 | を | ある人 | が | 宮中に | 献上し | た | が、その | 時、御前 | に |

侍り | | けれ | ば、その | 花 | を | 賜ひ | て | 歌 | | 詠め | と | | 仰せごと | | あり | けれ | ば、
 お仕えし | ていた | 所、その | 花 | を | 下さっ | て | 歌 | を | 詠め | と | 帝の | お言葉 | が | あっ | た | ので、詠みました。

参考

『伊勢大輔集』によれば、この歌が詠まれたのは一条天皇の御前で、中宮璋子、藤原道長、紫式部などが同席していた。奈良の僧が八重桜を献上した時、その取り継ぎ役を紫式部が新人の伊勢に譲り、道長が歌を詠むことを促したと言う。『袋草紙』によれば、作者がこの歌を即興で詠んだ時、「万人感嘆、宮中鼓動」したとある。また、紫式部が璋子の返歌を代作して「九重ににほふを見れば桜狩かさねてきたる春かとぞ思ふ」と詠んだという。この話は、平安宮廷文化最盛期を語るエピソードであると言える。

品詞分解

いにしへ | の | なら | の | 都 | の | 八重桜 | 今日 | 九重 | に | 匂ひ | ぬる | かな
 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 副 | 名 | 格助 | 八四用 | 助動完了体 | 終助詠嘆

62

| 夜 | | を | こめ | て | 鳥 | の | そら音(ね) | | は | はかる | と | も |
 たとえあなたが | 夜 | であることを | 隠し | て | 鶏 | の | 鳴きまね | をして | | だまそう | とはしても、

| よに | | 逢坂の関 | | | は | 許さ | じ | |
| | | 逢ふ | | | | |
函谷関ではないので、決して | あなたと | 逢う | という |
| 逢坂の関 | | を | | 許す | つもりはありませんよ。

作者

清少納言。生没年未詳。少納言清原元輔の娘。一条天皇の中宮定子の女官。「枕草子」の作者。

詞書

大納言 行成 | 、 | 物語 | など | し | 侍り | ける | に、「内 | の | 御物忌 | に | こもれ | ば」
大納言の行成様 | が、私の部屋の前で | 雑談 | など | なさい | まし | た | 後で、「宮中 | の | 物忌 | に | 参籠する | ので」

と | | て | 急ぎ | 帰り | て、 | つとめて、「 | 鳥 | の | 声 | に | もよほさ | れ | て | | と |
と | 言っ | て | 急いで | 帰っ | て、その | 翌朝、「昨夜は | 鶏 | の | 声 | に | 急きたて | られ | て、早々に失礼しまして」と |

| 言ひ | おこせ | て | 侍り | けれ | ば、 | 「夜 | 深かり | | ける | 鳥 | の | 声 | | は、函谷関 | の | こと |
弁解を | 言って | よこし | | まし | た | ので、私が、「夜 | 更けに聞こえ | た | 鶏 | の | 声 | というのは、函谷関 | の | こと |

に | や | (侍る) | | 」と | 言ひ | 遣はし | たり | ける | を、立ち帰り、「これ | は | | 逢坂の関 | に |
で | | ございます | か」と | 返事を | 送っ | た | | と | ころ、すぐまた、「あれ | は | 関は関でも、逢坂の関 | で |

侍る | | と | | あれ | | ば、詠み | 侍り | ける | | 。
ございます (実はあなたと「逢ふ」ことを願ったのですが) 」と | 返事を返してきた | ので、詠み | まし | た | 歌

鑑賞

函谷関について

中国の戦国時代に、斉の孟嘗君(もうしょうくん)が秦の宰相として招かれていた時、秦の昭襄王に疑われ、殺されそうになった。孟嘗君は急いで秦を逃げ出し、夜中に国境の函谷関までたどり着いた。しかし関は朝になって鶏が鳴くまでは戸を開けない規則だった。昭襄王の追っ手が迫って困っている時、孟嘗君が養っていた食客の一人が物真似の名人で、鶏の鳴きまねをした。すると、それにつられて本物の鶏も鳴き始め、これ

逢坂と逢ふは掛詞。

逢坂の関 京都から滋賀県の
大津に抜ける道(現在の国道
一号線)のにあった関所。伝
承によって、現在、記念公園
と石碑が作られている。

関は許さじ 「を」を補って
いる。補う助詞は「をにのは
が」と憶えるといふ。

出典

後拾遺集・巻十六・雑二・939

によって関の戸が開かれた、孟嘗君は無事に秦を脱出することができた。(『史記・孟嘗君伝』より)

品詞分解

夜 | を | こめ | て | 鳥 | の | 空音 | は | はかる | とも | よに | 逢坂の関 | は | 許さ | じ
名 | 格助 | マ下二用 | 接続助 | 名 | 格助 | 名 | 係助 | ラ四終 | 接続助 | 副 | 名 | 係助 | サ四末 | 助動形 | 消息志終

63

今 | は | ただ | | 思ひ絶え | な | む | と | | ばかり | を |
今となって | は、もう、あなたを | 思い諦め | てしまお | う | という言葉 | だけ | を、

人づて | | なら | で | | 言ふ | よし | | もがな
[に・・あら]

人づて | で | は | なく | て | 直接あなたに | 言う | 方法 | が | あるとよいのになあ。

作者

左京大夫(だいぶ)(藤原)道雅。正暦3年(992)~天喜2年(1054) 内大臣藤原伊周(これちか)の長男。

詞書

伊勢 | の | 斎宮 | わたり | より、まかり | 上り | て | 侍り | ける | 人 | | に、
伊勢 | の | 斎宮 | あたり | から | 都に | 帰っ | て | おりまし | た | 人 | の所 | に、

忍び | て | | 通ひ | ける | こと | を、おほやけ | も | 聞こしめし | て、守り | め | など | | 付け | させ | 給ひ | て、
内密 | で | 違いに | 通っ | ていた | こと | を、三條院 | も | お聞きになっ | て、警護の | 女官 | など | を | | お | |
| 付け | になっ | て、

忍び | に | も | 通は | ず | なり | に | | けれ | ば、詠み | 侍り | ける | | 。
密会 | に | も | 通え | なく | なっ | てしまっ | た | ので、詠み | まし | た | 歌

参考

とばかりを 「と」の後には「言ふ」が省略されていることが非常に多い。 19・86

伊勢の斎宮 三條院の皇女当子(まさこ)内親王。ここでは「斎宮わたりより...人」と、ぼかした表現をしている。
斎宮 伊勢神宮に仕える未婚の皇女。また、その住む宮。斎宮の皇女は、任を終えたあとも恋愛は禁止された。
まかり上りて 「まかり」は謙義語。この場合は、作者道雅の(天皇のいる)都に対す

平安朝の貴族社会を揺るがしたこの悲恋物語は「栄華物語」に詳しい。作者藤原道雅は中関白藤原道隆を祖父とし、内大臣（儀同三司）藤原伊周を父とし、清少納言の女主人中宮定子を叔母とする貴公子だったが、三歳で祖父を失い、さらにその翌年、父と伯父藤原隆家が政治上・素行上の失策で失脚し、家が没落する中で成長した。作者十八歳の時、失意のうちに病没した父伊周は、道雅に「人に追従して生きるよりは出家せよ」と遺言したという。しかし道雅は出家せず乱れた生活を送り、「荒三位」と渾名された。この恋愛事件を起こしたのは長和5年（1016）作者24歳の時で、恋人の当子内親王は翌年髪を切って仏門に入り、その父三条院も心痛のため病に伏し、まもなく崩御した。道雅はその後、皇女の女官の殺人事件に関与したり、博打場で暴行事件を起こすなど乱行が絶えなかったが、名門ゆえにうやむやにされた。後半生は実権のない職をあてがわれ、不遇な生活を送ったという。

品詞分解

今 | は | ただ | 思ひ絶え | な | む | と | ばかり | を | 人づて | なら | で | 言ふ | よし | もがな
 名 | 係助 | 副 | ヤ下二用 | 助動完了未 | 助動意志終 | 格助 | 副 | 格助 | 名 | 助動断定未 | 接続助 | 八四体 | 名 | 終助希望

64

朝ぼらけ | 宇治 | の | 川霧 | | 絶え 絶え に | | あらはれ | わたる |
 夜がほのぼのと明ける頃、宇治川 | の | 川霧 | が | 消え 消え に | なり、
 | 霧の絶え間絶え間に | | | 次第に遠くまで |
 | 現 われ | てくる |

瀬 々 | の | 網代木 |
 浅瀬浅瀬 | に仕掛けた | 網代木 | の広々とした幻想的な景色であることよ。

作者

権中納言（藤原）定頼。長徳元年（995）～寛徳2年（1045） 四条中納言藤原公任の子。

品詞分解

朝ぼらけ | 宇治 | の | 川霧 | 絶え絶えに | あらはれ | わたる | 瀬々 | の | 網代木
 名 | 名 | 格助 | 名 | 形容動ナリ用 | ラ下二用 | ラ四体 | 名 | 格助 | 名

る敬意が表現されている。

7・43・53・55・71

出典

後拾遺集・巻十三・恋三・750

宇治（うぢ）の川霧 琵琶湖から流れ出した瀬田川が、宇治の辺りでは宇治川と呼ばれる。平安時代、宇治の辺りは低湿地で、巨椋池（むぐらがいけ）という巨大な池があり、川霧が名物だった。

朝ぼらけ 初句切れとする説もある。

出典

千載集・巻六・冬・420

薄情なあなたを | 恨み | 侘(わ)び | 乾(ほ)さ | ぬ | 袖 | だに | ある | ものを |
 恨み | 嘆い | て、涙を乾(ほ)す | ひまもない | 私の | 袖 | さえ | 口惜しい | のに、
 | まして |

あなたに捨てられて、恋 | のために | 浮き名が立って | 朽ち | な | む |
 朽ち | てしまう(だろう) | その |

私 | の | 評判 | こそ | が | 一層、口惜しい | こと | です | よ。 | 惜しけれ

作者

相模。生没年未詳。源頼光の養女。夫であった大江公資(きんすけ)が相模守だったので相模と呼ばれたらしい。入道一品宮脩子内親王(一条天皇の第一皇女。母は藤原定子)に仕え、第一流の女流歌人として長く活躍した。この歌が発表された永承六年内裏歌合の時には五十余歳だったと言われる。

品詞分解・係り結び

恨み | 侘び | ほさ | ぬ | 袖|だに| ある |ものを|恋|に| 朽ち | な | む | 名|こそ| 惜しけれ
 マ上二用 | パ上二用 | サ四未 | 助動打消体 | 名|副助|ラ変体|接続助|名|格助|タ上二用 | 助動完了未 | 助動婉曲仮定体 | 名|係助|形容シク已

私と | いっしょに、お互いに | あはれ | と | 思へ | 山桜 |
 ああ | 懐かしい | と | 思い合ってくれ、山桜よ。

だに 軽いものを挙げて、重いものを類推させる。この場合の軽いものは「恨み侘び乾さぬ袖」が少し口惜しいこと、重いものは「恋に朽ちなむ名」がもっと口惜しいこと。

51・90

あるものを 「あり・す・ものす」は文脈を見て柔軟に訳す。 34・53

朽ちなむ 連体修飾・準体法の「む」は、ほとんどの場合「婉曲・仮定」である。「恋に朽ちてしまうその私の悪評」「恋に朽ちてしまうかも知れないその私の悪評」などと訳せる。 56・67

名こそ惜しけれ 「が」を補っている。補う助詞は「をにのはが」と憶えるとうい。

出典

後拾遺集・巻十四・恋四・815

山奥で仏道修行に励む私には、おまえ | より | ほか | に | 知る | 人 | も | なし
山奥で仏道修行に励む私には、おまえ | より | ほか | に | 知ってくれる | 人 | も | いないのだから。

作者

前(さきの)大僧正行尊。天喜3年(1055)~保延元年(1135)、平等院大僧正とも呼ばれた。参議源基平の三男。十歳の時父を失い、十二歳で出家し、三井寺に入った。十七歳から諸国を遍歴し、天台座主から大僧正に叙せられた。山伏修行の行者として名高く、白川・鳥羽・崇徳三天皇の護持僧として信が厚く、熊野御幸などにも従った。

詞書 大峰 | にて、思ひ | も | かけ | ず | 桜 | の | 咲き | たり | ける | | を | 見 | て、詠 | め | る | 。
大峰山 | で、思い | も | かけ | ず | 桜 | が | 咲い | てい | た | の | を | 見 | て、詠 | ん | だ | 歌。

品詞分解・句切れ

もろともに | あはれ | と | 思へ | 山桜 | 花 | より | ほか | に | 知る | 人 | も | なし
副 | 感動 | 格助 | 八四命 | 名。名 | 副助 | 名 | 格助 | 四四体 | 名 | 係助 | 形容ク終

67

春 | の | 夜 | の | 夢 | ばかり | | なる | 《手(た)枕》 |
〔に・ある〕

春 | の | 夜 | の | 夢 | ほど | 仮初め | で・ある | あなたの | 腕 | 枕 | をうっかりお借りしても、
真剣に愛し合う訳でもない二人なので、

に | 甲斐(かひ) | なく | 立た | む | 名 | こそ | | 惜しけれ
《腕(かひ) | な》
それによって | 意味 | もなく | 立つ(であろう) | 浮き名 | こそ | が | 口惜しいことですよ。

作者

周防内侍(すおうのないし) 生没年未詳。平安後期の女流歌人。周防守平棟仲の娘と言われ、名前も父の官職名から来ている。後冷泉・白川・堀川の各天皇に仕えた。「十訓抄」や「讒岐典侍日記」に名が見え、平安後期の主要な歌合わせにも参加している。

大峰 大峰山。奈良県吉野郡にある大峰山脈の、山上ヶ岳の南にある小篠(おざさ)から熊野までの峰々をさす。修験者の根本霊場。

出典

金葉集・巻九・雑上・521

甲斐なくと腕(かひな)は掛詞(かけことば)

手枕と腕は縁語。

立たむ 「む」は推量というより、単に「立つ浮き名」立つかも知れない「浮き名」などとも訳せる。こういう「む」の使い方を「婉曲・仮定」と

心 | に | も | あら | で | | | | 憂(う)き世 | に | 長らへ | ば |
 (本心から | で | も | なくて)
 心 | なら | | ず | も、この | つらい 世 | に | | もし |
 | 生き長らえ | たならば

恋し かる | べき | | | | 夜半(よは) | の | 月 | かな
 [恋しく・ある]
 | きっと |
 恋しく・思い出す | であろう、美しく澄み切ったこの | 夜半 | の | 月 | であることだなあ。

作者

三条院。貞元(じょうげん)元年(976)~寛仁元年(1017) 第六十七代天皇。一条天皇と後一条天皇(一条天皇と藤原彰子の子)の間の五年間を在位したが、左大臣藤原道長と不和。母は藤原超子、皇后は藤原皿子。藤原道雅と密通した当子内親王の父。

詞書

例ならず | おはしまし | て、位(くらゐ)など | | 去ら | む | と | 思し召し | | ける | 頃
 (普通で | なく | いらっしやっ | て)
 病気に | なられ | て、皇位 | なく | を | 去る | う | と | 御思いになっ | ていた | 頃

月 | の | 明(あか)かり | ける | | を | ご覧じ | | て、
 月 | の | 明かる | かつ | た | の | を | 御覧になっ | て、お詠みになった歌。

文法

心 | に | も | あら | で

「に」係助詞。「あり」の一族(あり・おはす・おはします・さうらふ等)の詞順で使われる「に」は、断定の助動詞「なり」の連用形で、「で」と訳す。「あり」の一族とは、「あり」とその尊敬語・謙讓語・丁寧語のことである。

べき ここでの文法的意味は「確信的推量」。67・88
 夜半の月 詞書の「月の明かりけるを」とも考え合わせると、夜半に南の空高く照らす満月だろう。

出典

後拾遺集・巻十五・雑一・860

品詞分解

心 | に | も | あら | で | 憂き世 | に | 長らへ | ば | 恋しかる | べき | 夜半 | の | 月 | かな
名 | 助動断定用 | 係助 | ラ変末 | 接続助 | 名 | 格助 | ハ下二末 | 接続助 | 形容シク体 | 助動推量体 | 名 | 格助 | 名 | 終助詠嘆

69

嵐 | 吹く | み室の山 | の | もみぢ 葉 | は |
強い風 | が | 吹き付ける | み室の山 | の | 紅葉の落葉 | は、風に散り、そのまま、

竜田の川 | の | 錦 | なり | けり
〔に・あり〕
麓を流れている | 竜田 川 | を美しく彩る | 紅葉の錦 | で・あるのだ | なあ。

作者

能因法師。永延2年(988)～没年未祥。遠江守橘忠望の子。

参考 歌枕 竜田川・み室の山

古来、奈良の都の東方の山を佐保山、西方の山(現在の生駒山地)を竜田(立田)山と呼び、佐保山には春の女神の佐保姫、竜田山には秋の女神の竜田姫が宿るとされた。竜田川は竜田山を流れる川で、古くから紅葉の名所とされる。竜田川は¹⁷にも詠まれている。み室の山(三室の山・御室の山)は奈良県生駒郡斑鳩町にあり、麓を竜田川が流れている。やはり、紅葉・時雨の名所である。このような歌の名所のことを歌枕と言い、ある一定の景物との組み合わせで詠まれることが多い。

品詞分解

嵐 | 吹く | み室の山 | の | もみぢ葉 | は | 竜田の川 | の | 錦 | なり | けり
名 | 力四体 | 名 | 格助 | 名 | 係助 | 名 | 格助 | 名 | 助動断定用 | 助動詠嘆終

み室の山 参考

竜田の川 竜田川 ¹⁷

錦 種々の彩糸を駆使して紋様を織り出した織物の総称で、華麗なものの代名詞のように使われる。西陣織がその一つである。 ²⁴

錦なりけり 「けり」は発見詠嘆。

出典

後拾遺集・巻五・秋下・366

| 寂しさ | に | | 宿 | を | たち出 (い) で | て | | ながむれ | | ば |
 あまりの | 寂しさ | に | 私の | 家 | を | 出 | て | あたり一帯を | 眺め | てみると、

いづこ | も | 同じ | | | 秋 | の | 夕暮れ | |
 どこ | も | 同じであることよ。このしみじみとした | 秋 | の | 夕暮れ | は、

作者

良暹(りょうぜん)法師。生没年・伝記未詳。京都大原の里の草生に住んだ。

鑑賞

「秋の夕暮れ」の文学史

季節と時刻と天候の組み合わせの中から「秋の夕暮れ」を切り取り、それ的確な描写を加えて文学的価値を与えたのは青少納言だった。名高い「枕草子」の初段に次のようにある。

秋は夕暮れ。夕日の差して山の端いと近うなりたるに、からすの寝所へ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まいて雁などの連ねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入りはてて、風の音、虫のねなど、はたいいふべきにあらず。

枕草子では「秋の夕暮れ」は「をかしき」もの、むしろ明るく「みやび(宮廷風)」な風景の一つとして理知的に捉えられている。しかし、平安の歌人たちはそれを受容しながら、次第に「秋の夕暮れ」のイメージを変容させていった。新古今和歌集「秋上」には、第五句が「秋の夕暮」である三首の和歌が並んで配置されている。

さびしさは其の色としもなかりけりまき立つ山の秋の夕暮 寂蓮法師(361)
 心なき身にもあはれはしらねけり鳴(しぎ)立つ沢の秋の夕暮 西行法師(362)
 み渡せば花ももみぢもなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ 藤原定家(363)

寂蓮の歌は「さびしさ」と美的対象の不在を詠んでおり、西行の歌も「心なき身」つまり俗世の価値を脱却した世捨て人の身の上の作者が捉えた「あはれ」であり、定家の歌は、むしろ過激な「花」と「もみぢ」という伝統美への反逆であり、「幽玄・有心」の美的価値への密かな接近であるように見える。

宿 大原にあった作者の草庵のこと。

秋の夕暮れ 体言止めで余情を出している。

同じ 連体形と捉えて解釈すれば、句切れなしとなる。

出典

後拾遺集・巻四・秋上・333

鑑賞

この歌は、平安時代の歌としては珍しく、事実を客観的に描写した叙景歌である。藤原定家はこの歌を「麗(うらは)しき様」(きちんと整った、端正な歌風)の歌と評価したが、その通りで、後年、正岡子規が提唱した「写実」の理念に通じるものを持っている。

品詞分解・係り結び

夕され | ば | かどた | の | 稲葉 | 訪れ | て | 芦 | の | まろや | に | 秋風 | そ | 吹く
ラ四已 | 接続助 | 名 | 格助 | 名 | ラ下二用 | 接続助 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 係助 | 力四体

72

《音》 | に | 聞く | 高師の 浜 | の | あだ | 波 | | は |
《高し》

世評 | に | 聞いている | 高師の 浜 | の | いたずらに騒ぐ | 波 | のような |
評判 | の | | 高い あなた | の | 移り気な | 言葉 | | に | は |

かけ | じ | や | | 袖 | の | 濡れ | | も | こそ | すれ
掛け 濡れ
信用を置く | つもりはありません | よ、それでは、私の | 袖 | が | 濡れる、
| 私が | 泣く | ことに | も | ! | なる、
そうになったら困りますから。

作者

祐子内親王家紀伊(ゆうしないしんのうけのきい) 生没年未祥。紀伊守藤原重経の妹。

文法

もこそ 「も」は、ある事柄が存在し、それに類似のものが付け加わる意味を表す。「こそ」は、それだけを取り出して強調する意味を表す。この二つを同時に使うと、「そのようなことが起きることもあるぞ」と強く言うことになる。「袖が濡れもこそすれ」は、「袖が濡れるようなこともあるぞ」と強く言う、つまり「袖が濡れたら大変じゃないか」と言うことになる。そこで、危惧を表すことが非常に多い。89の「もぞ」も同様である。危惧は、「悪いことがあるぞ」という意味だが、なぜ「よいことがあるぞ」という場合に「もこそ」や「もぞ」を使わないのか。それは、悪いことは向かい風と同じで、良いことよりも、我々の心理にその存在を強く印象付けるからだろう。

謙讓語。この場合は、作者経信の、読者(貴族や皇族たち)に対する敬意が表現されている。 7・43・53・55・63

出典

金葉集・巻三・秋・173

高師の浜 大阪府堺市浜寺付近の海岸。南海電鉄の高師浜の駅名となっている。

高師と高しは掛詞(かけことば)

音と高しは縁語。

かけ(人の言葉を気にかける、信用をおく)とかけ(波をかける)は掛詞。

波に濡れと袖の濡れは掛詞。

波と掛けと濡れは縁語。

品詞分解・係り結び

音|に|聞|高師の浜|の|あだ波|は|かけ|じ|や。袖|の|濡れ|も|こそ|すれ
 名|格助|カ四体|名|格助|名|係助|カ下二未|助動打消意志終|間投助。名|格助|ラ下二用|係助|係助|サ変已

73

高砂|の|尾上(おのへ)|の|桜|咲き|に|けり|
 高砂|の|
 高い|峰の上|の|桜が|咲い|た|ことだなあ。その桜が見たいので、
 外山|の|霞|立た|ず|も|あら|なむ
 手前の|人里に近い山々|の|霞|は|桜が見えなくなるので、そんなに|立た|なくて|も|いい|のになあ。

作者

前中納言(大江)匡房。長久2年(1041)~天永2年(1111) 博学で秀才の誉れが高かった。

品詞分解・句切れ

高砂|の|尾上|の|桜|咲き|に|けり。外山|の|霞|立た|ず|も|あら|なむ
 名|格助|名|格助|名|カ四用|完了用|助動詠嘆終。名|格助|名|タ四未|打消用|係助|ラ変未|終助願望

74

憂|かり|ける|人|を|初瀬|の|
 [憂く・あり]
 私に対して|冷淡であっ|た|人|を、優しくなってくれるように|初瀬|の観音に祈ったのだが、
 その|初瀬|の|
 山|おろし|よ|
 山から吹き下ろす風|よ、お前のように、

かけじや 三句の途中で切れる。

出典

金葉集・巻八・恋下・469

高砂 播磨の国(兵庫県)の歌枕。

外山 奥山ではなく、人里に近い山。作者から見ると、手前に見える山。

立たずもあらなむ 「も」は係助詞。他のことが同時に存在する事を容認する意味を表す。「立つのもよいが、桜が見えなくなるほど立たなくてもよい」

出典

後拾遺集・巻一・春上・120

初瀬の山おろしよは激しかれとは以下を呼び出すための序詞。

初瀬 奈良県桜井市初瀬(はせ)の長谷寺のこと。長谷観音を祀る。 35

出典

千載集・巻十二・恋二・708

| 激し か れ | と | は | 祈ら | ぬ | ものを
[激しく・あれ]

反対に、冷淡さがますます | 激しく なれ | と | は | 祈ら | なかった | のになあ。

作者

源俊頼朝臣。天喜3年(1055)~大治4年(1129) 大納言経信の子。金葉集の撰者。

文法

隠れている「あり」

形容詞の活用を理解する時、「憂かり | ける」は「憂く | あり | ける」、「激しかれ」は「激しく | あれ」、「激しから | ず」は「激しく | あら | ず」
「激しかる | べし」は「激しく | ある | べし」が短縮したものと理解すると、簡単に理解できる。

打消しの助動詞「ず」なども同じで、「あら | ざら | む」は「あら | ず | あら | む」、「あら | ざり | けり」は「あら | ず | あり | けり」
「あら | ざる | べし」は「あら | ず | ある | べし」が短縮したものである。

完了・存続の助動詞「たり」は「て | あり」が短縮したものである。

過去の助動詞「けり」は「き | あり」が短縮したものであるという説があり、そう考えると理解しやすい。

形容動詞も同じで、「静かなら | ず」は「静かに | あら | ず」
「静かなり | けり」は「静かに | あり | けり」
「静かなる | べし」は「静かに | ある | べし」
「静かなれ」は「静かに | あれ」が短縮したものである。

よく考えると、現代語にも同じ現象がある。「寒かつ | た」は「寒く | あっ | た」が短縮したものである。

このように、元の語形に「あり」を付けて出来た活用の仕方を「ラ変型活用」と言う。

品詞分解

憂かり | ける | 人 | を | 初瀬 | の | 山おろし | よ | 激しかれ | と | は | 祈ら | ぬ | ものを
形容詞用 | 助動過去体 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 間投助 | 形容シク命 | 格助 | 係助 | ラ四末 | 助動打消体 | 接続助

75

| 契(ちぎ)り | おき | し | させも | が |
《 置き 》

わが子を講師にすると、あなたが | 約束して | かけて | 下さった | させも | 草 | のような |
| 何の力もない | ぬ | | への |

契りおきし 「し」は回想過去「き」の連体形で、「そのことをはっきり記憶している」の意。「あなたが約束したことは、はっきり憶えていますよ」

《露》を|命|に| | |て|
お情けの|露|を|命|と|頼ん|で|待っていました、

あはれ|今年|の|秋|も| | | |往(い)ぬ | めり
[見え・あり]
ああ、今年|の|秋|も、望みが叶わないまま、過ぎて|行ってしまう|よう ですね。

作者

藤原基俊。天喜4年(1056)~康治元年(1141)。藤原道長の曾孫。藤原俊成の師。

詞書

|律師光覚| |維摩 会|の|講師| |の|請|を|申し|ける|を、
わが子|律師光覚|が|維摩経を講義する法会|の|講師|になるため|の|請願|を|申し上げ|た|が

たびたび| |洩れ|に|けれ|ば、法性寺入道前太政大臣|に|恨み|申し|ける|を、
たびたび|人選に|洩れ|てしまっ|た|ので、関白藤原忠通|に|苦情を|申し上げ|た|所、

「しめじ|の|原|の」と| |侍り| |けれ|ども、又|そ|の|年|も|
「私を頼りにせよ」と|いうご返事が|ございまし|た|が、又|そ|の|年|も|

|洩れ|に|けれ|ば、詠み|て| |遣はし|ける|。
人選に|洩れ|てしまっ|た|ので、詠ん|で|太政大臣に|贈っ|た|歌

参考 させもが露

袋草紙によると、男との仲で悩み、願いが叶わないなら自殺すると訴えた女に、清水の観音が啓示した歌として、

なほ| |頼め| |しめぢが原の|させも 草|
やはり|私に|帰依せよ、しめぢが原の|させも 草|のような|
|何の力もない一切衆生| |よ。

という気持ちが含まれている。³⁸・⁴¹・⁹⁰

させも 「させも草」のことで、参考に示した清水の観音の歌によって「何の力もない一切衆生」という意味が掛けられている。作者は自分を観音にすぎる衆生に喩えて藤原忠通に請願したのである。

契りおきと置きは掛詞。

置きと露は縁語。

往ぬめり 「めり」は「見えあり」が短縮されたとする説があり、目で見て推量するのが本来の意味だが、この歌の場合は事態を柔らかく推量する意味で使われている。

出典

千載集・巻十六・雑上・1026

しめぢの原 下野の国の歌枕。させも草の名所。

させも草 蓬の古称。何の力もない雑草。荒れ果てた土地に生えている雑草のイメージ

わが 世の中に | あら | ん | かぎりは

私がこの世の中に | 存在する(であろう) かぎりは。(新古今集・卷廿・釈教・1916・清水寺観音の御歌)

品詞分解

契り | おき | し | させも | が | 露 | を | 命 | に | て | あはれ | 今年 | の | 秋 | も | いぬ | めり

ラ四用 | カ四用 | 助動回想過去体 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 助動断定用 | 接続助 | 感動 | 名 | 格助 | 名 | 係助 | ナ変終 | 助動視覚推定終

76

わたの原 | 漕ぎ出(い)で | て | 見れ | ば |

大 海原 | に舟を | 漕ぎ出し | て | 見渡す | と、

久方 | の | 雲居(くもゐ) | に | まが | ふ | 沖 | つ | 白波 |

| 雲 | と | 見紛(まが)う | ような | 沖 | の | 白波 | が一面に立っていることだ。

作者

法性寺入道前関白太政大臣(藤原忠通)。詩歌・書道に優れていた。保元の乱で、弟頼長を倒した。

品詞分解

わたの原 | 漕ぎいで | て | 見れ | ば | 久方 | の | 雲ゐ | に | まがふ | 沖 | つ | 白波

名 | ダ下二用 | 接続助 | マ上一已 | 接続助 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 八四体 | 名 | 格助 | 名

77

瀬 | を | 速・み | 岩 | に | 堰(せ)が | るる | 滝川 | の |

川瀬 | の流れ | が | あまりに | 速い・ので、 | 岩 | に | 流れを | 堰きとめ | られる | 急流 | が |

周囲 | に | 恋仲を | 遮(さえぎ)ら | れる | 二人 | が |

で使われることが多い。同じようなものに、「浅茅生」³⁹、「八重葎」⁴⁷、「さしも草」⁵²、「蓬生(よもぎふ)」などがある。

久方の「雲・日・月」などに掛かる枕詞

雲居 雲の居る所。大空。高い空。宮中。「雲井」とも書く。ここは、「雲」の意味で用いている。

沖つ白波 ¹²

出典

詞花集・卷十・雑下・382

現代語訳は、の順に読むこと。

瀬を速み岩に堰かるる滝川の
は割れても末に以下を呼び出

| 割れ | て | も | 末(すゑ) | に | | あは | | ん | と | ぞ | 思ふ
今は二つに | 分かれ | て | も | 下流 | で | また | 合流する | ように、
今は | 別れ | て | も、将来 | には | また | 一緒になり | | たい | と | ! | 思うことだ。

作者

崇徳院。元永2年(1119)～長寛2年(1164)、第75代天皇。鳥羽天皇の第一皇子。日本の歴史で政権が貴族から武士へと移行するきっかけとなった保元の乱は、1156年に起きたが、この時、皇室は崇徳上皇と後白河天皇、摂関家は藤原頼長と藤原忠通、源氏は源為義と源義朝、平家は平忠正と平清盛がそれぞれ対立し、上皇派と天皇派の二派に分かれて戦った。この戦いで敗者となった崇徳は讃岐に流され、以後8年間配流の地で軟禁生活を送り、恋願った帰京を許されることなく、8年後に46歳で崩御した。崇徳院は生前に、自らを配流した者たちへの怒りや恨みを抱いたという記録はない。また、崇徳院は、配流先で国府役人の娘との間に一男一女をもうけている。朝廷も崇徳院を罪人として扱い、怨霊として意識することはなかった。しかし、崇徳院崩御後12年目の安元二年(1176)頃から、延暦寺の強盗、大火、政府転覆の陰謀、貴顕の相次ぐ突然死などで社会に不安が広がると、これらが崇徳院の怨霊の仕業ではないかという噂が語られるようになった。この噂に精神的に追い詰められた後白河上皇は、崇徳院を怨霊として手厚く祀るように政策を改めた。ここから、崇徳院怨霊伝説が定着した。

文法

瀬を速み

① の文法 と同じで、 瀬 | を | 速 ・ み |
川瀬の流れ | を | 速い ・ と思って |

と訳しても、川瀬の流れを擬人化した解釈として意味は通るが、本書のように「川瀬の流れがあまりにも速いので」と訳するのが一番自然である。

参考 掛詞と比喩・対照表現

「岩に堰かるる滝川」は「周囲に恋仲を遮られる二人」を「岩に流れを堰き止められる急流」という風景に喩えている。そこで、「堰か」と「滝川」は、比喩表現に絡んで縁のある語が用いられているので、縁語であると説明される。「割れ」は「二人が別れる」ことを「急流が二つに分かれる」ことに喩えている。そこで、「割れ」と「あは」は比喩表現に絡んで縁のある語が用いられているので、縁語であると説明される。「割れ」と「合は」は縁語ではなく、対照表現と説明する説もある。

品詞分解・係り結び

瀬 | を | はや ・ み | 岩 | に | せか | るる | 滝川 | の | 割れ | て | も | 末 | に | あは | ん | と | ぞ | 思ふ
名 | 格助 | 形容語幹 ・ 接尾 | 名 | 格助 | カ四末 | 助動受身体 | 名 | 格助 | ラ下二用 | 接続助 | 係助 | 名 | 格助 | 八四末 | 助動意志末 | 格助 | 係助 | 八四体

すための序詞。

岩に堰かるる 「...に～る・

らる」の形で使われている

「る・らる」は受身である。

㊦・㊧

割れと合はは対照表現。

出典

詞花集・巻七・恋上・229

淡路(あはぢ)島 | 通ふ | 千鳥 | の | 鳴く | 声 | に |
 須磨から淡路 島に | 飛び通う | 千鳥 | の | 鳴く | 声 | のために、

幾夜 | 寝ざめ | ぬ | | 須磨 | の | 関守
 幾夜 | 目を覚まし | てしまった | だろうか。須磨の関 | の | 関守は。

作者

源兼昌。生年未詳～天永3年(1112) 宇多天皇の子孫。従五位下皇后宮大進。

文法

疑問語と係り結び

「幾夜」は疑問副詞なので、文末は連体形の「ぬる」になることが多いのだが、ここは例外で、終止形「ぬ」になっている。語調を整えるためだろうと考えられる。この「ぬ」は、打消しの助動詞「ず」の連体形ではない。

品詞分解・句切れ

淡路島 | 通ふ | 千鳥 | の | 鳴く | 声 | に | 幾夜 | 寝ざめ | ぬ 。須磨 | の | 関守
 名 | 八四体 | 名 | 格助 | カ四体 | 名 | 格助 | 名 | マ下二用 | 助動完了終。名 | 格助 | 名

秋風 | | に | | たなびく | 雲 | の | 絶え間 | より |
 秋風 | が吹くこと | によって | たなびく | 雲 | の | 切れ目 | から、

漏れ | 出(い)づる | 月 | の | 影 | の | | さやけさ |
 漏れて | 射してくる | 月 | の | 光 | の、なんと | 澄みきった明かるさ | であることよ。

作者

左京大夫顯輔(さきょうのだいゐあきすけ) 寛治4年(1090)～久寿2年(1155) 詞花集の撰者。

淡路島 兵庫県の須磨・明石の、明石海峡を隔てた対岸の島。

千鳥 世界中に分布する水辺の小鳥。海岸だけでなく、干潟、河川、湿原、草原などの様々な環境に生息する。

須磨の関守 須磨の関所を守る兵士。

幾夜寝ざめぬ 兵士の孤独な心に、作者の心が反映されている。

四句と五句は倒置で、四句切れ。

出典

金葉集・巻四・冬・270

秋風に 「に」は原因・理由を表す格助詞。

漏れ出づる月 歌意からして、満月に近い月だろう。

出典

新古今集・巻四・秋上・413

品詞分解

秋風 | に | たなびく | 雲 | の | 絶え間 | より | 漏れ | | いづる | 月 | の | 影 | の | さやけさ
名 | 格助 | カ四体 | 名 | 格助 | 名 | 副助 | ラ下二用 | ダ下二体 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名

80

長から | | む | | | 心 | も | 知ら | ず |
〔長く・あら | | 〕

末長く・私を愛してくれる | だろうかどうか、そのあなたの | 本心 | も | 知ら | ない | まま、

| 黒髪 | の | | | 乱れ | て | 今朝 | は | | もの | を | こそ | 思へ
昨夜のままの | 黒髪 | のように、心も | 乱れ | て、今朝 | は (| もの | を | ! | 思う | ことよ。)
| 恋のもの | | | 思い | に | つける | ことよ。

作者

待賢門院堀河。生没年未詳。鳥羽院の皇后待賢門院の女官。西行法師と和歌の親交があった。

文法 逆接接続による強調

「ものをこそ思へ」は47の文法の規則によれば「ものを思う、しかし、恋は叶わない」などと逆説的に後に続くと解釈する事もできるが、この場合、少しうがち過ぎになる。逆接表現は、単に強調するために使われることも多いのだ。「ちょっと、君、邪魔なんだけど、」と言うと、「邪魔なんだけど、そこにいてもいいよ」ではなく、「邪魔なので、どいてくれ」という意味になる。この歌の場合も同じで、「こそ思へ」は逆説的な余韻を持たせることによって、強調を表現しているのである。

品詞分解・係り結び

長から | | む | | 心 | も | 知ら | ず | 黒髪 | の | 乱れ | | て | 今朝 | は | もの | を | こそ | 思へ
形容ク未 | 助動推量体 | 名 | 係助 | ラ四未 | 助動打消用 | 名 | 格助 | ラ下二用 | 接続助 | 名 | 係助 | 名 | 格助 | 係助 | 八四巳

出典

千載集・卷十三・恋三・802

ほととぎす | 鳴き | つる | かた | を | 眺むれ | ば |

ほととぎす | が | たった今 |

| 鳴い | た | 、その方角 | の空を | 眺める | と、ほととぎすは既にどこかに飛び去って、

ただ | 有明 | の | 月 | ぞ | 残れ | る |

[残り | ある]

ただ、明け方 | の | 月 | だけ | が | ! | 東の空に、消え残っ | ていた。

作者

後徳大寺左大臣（藤原実定）保延5年（1139）～建久2年（1191）藤原公能の子で藤原俊成の甥。

鑑賞

明け方にほととぎすの初音を聞くことは、平安の貴族たちにとって、この上なく風雅なことだった。枕草子にも次のようにある。

五月雨 | の | 短き | 夜 | に | 寝 | 覚め | を | し | て、いかで | 人 | より | 先 | に | 聞か | む | と |

五月雨 | の | 降る | 短い | 夜 | に | ふと | 目を覚まし | て、ぜひ | 他人 | より | 先 | に | 初音を聞こ | う | と |

待た | れ | て、夜深く | うち出で | たる | 声 | の、らうらうじう | 愛敬づき | たる | 、

待ち遠しくて | たまらず | 、まだ暗い頃 | 鳴き出し | た | 声 | が、垢抜けして | 可愛らしい | のを聞くと、

いみじう | 心 | あくがれ | 、せむかた | なし | 。

もう | 心 | も | うっとりして、どうしよう | もない | ほど素敵。

品詞分解・係り結び

ほととぎす | 鳴き | つる | かた | を | 眺むれ | ば | だけ | 有明 | の | 月 | ぞ | 残れ | る

名 | カ四用 | 助動完了体 | 名 | 格助 | マ下二已 | 接続助 | 副 | 名 | 格助 | 名 | 係助 | ラ四已 | 助動存続体

有明の月 旧暦27日前後の月。夜明けの二～三時間前に東の地平線に現れ、空が明るくなるまで、東の空に残り、空が明るくなると光を失い、白い月となる。形は三日月と同じで、下側が光っている。残月。残(のこ)んの月。

21・30・31

月ぞ残れる 「が」を補っている。補う助詞は「をにのはが」と憶えるとよい。

残れる 残月の意と、ほととぎすが飛び去った後も空に残っている意と、二つの意味を重ねている。

出典

千載集・巻三・夏・161

品詞分解・句切れ・係り結び

世の中 | よ | 道 | **こそ** | **なけれ**。思ひ入る | 山 | の | 奥 | に | も | 鹿 | **ぞ** | 鳴く | なる
 名 | 間投助 | 名 | **係助** | 形容ク已。ラ四体 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 係助 | 名 | **係助** | カ四終 | 助動伝聞推定体

84

長らへ | **ば** | | **また** | **こ** | の | **ごろ** | | **や** | **偲** **ば** | **れ** | | **む** | |
 | **もし** |
 生き長らえ | たならば、将来 | **また**、**こ** の | つらい現在 | **が** | | 恋しく思い出さ | **れる** | のだろう | **か**。

| **憂**(う) **し** | と | **見** | | **し** | | **世** | | **ぞ** | **今** | | **は** | **恋** **し** **き** |
 昔 | **つら** **い** | と | **思** っ て い | **た** | 過去の | **世** | **が** | !、**今** | **で** | **は** | **恋** しく | **思** い 出 さ れ る の だ か ら。

作者

藤原静輔朝臣。長治元年(1104)~治承元年(1177)。正四位下太皇太后宮大進。歌学者。

鑑賞

現在から過去を振り返り、それを基にして未来から見た現在を想像している。現代人の時間感覚にも通じる、理知的な歌である。こういう時間感覚は、万葉集には見られない。江戸時代の川柳子が、「順ぐりに昔のことを恋しがり」とこの歌をからかっているが、人間の心理を客観的に観察するという点では、共感している面もあるのだろう。

品詞分解・句切れ・係り結び

長らへ | **ば** | **また** | **こ** | の | **ごろ** | **や** | **しのば** | **れ** | | **む** | 。
 八下二未 | 接続助 | 副 | 代名 | 格助 | 名 | **係助** | 八四未 | 助動自発未 | 助動推量体。

憂 **し** | と | **見** | | **し** | | **世** | **ぞ** | **今** | **は** | **恋** **し** **き**
 形容ク終 | 格助 | マ上一用 | 助動回想過去体 | 名 | **係助** | 副 | 係助 | 形容シク体

りする程度で、遠鳴きはあまりしない。

出典

千載集・巻十七・雑中・1151

長らへば 「長らへ」は「長らふ」の未然形で、「ば」は仮定条件を表す。89

しのばれむ 「しのぶ」のような心情を表す動詞(心情動詞)に付いた「る・らる」は自発である。

出典

新古今集・巻十八・雑下・1843

85

夜もすがら | もの | 思ふ | 頃 | は | 明けやら | で |
 一晚 中、薄情なあなたの事で、もの | 思いに耽っている | この頃 | は | 夜はなかなか | 明け切ら | ないで、
 | 閨 | の | ひま | | さへ | つれな | かり | けり
 [つれなく・あり]
 明るくなってくれない | 寢室 | の | 戸の隙間 | | まで、 |
 | あなた | と同じように | 薄情 に・感じられる | ことよ。

作者

俊恵法師。永久元年（1113）～没年未詳。源経信の孫。源俊頼の子。奈良東大寺の僧。

品詞分解

夜もすがら | もの | 思ふ | 頃 | は | 明けやら | で | 閨 | の | ひま | さへ | つれなかり | けり
 副 | 名 | 八四体 | 名 | 係助 | ラ四未 | 接続助 | 名 | 格助 | 名 | 副助 | 形容ク用 | 助動態和終

86

嘆け | と | | て | 月 | | や | は | | もの | を | 思は | | する |
 「嘆け」と | 言っ | て | 月 | が | | 私に | もの | | 思い | を | させる | だろうか | !、
 いや、月ではなく、恋がそうさせるのだ。
 | か | こ | ち | | 顔 | | な | | る | わ | が | | 涙 | | かな
 [に・あ | る]
 それなのに、月に | 不平を言うかのような・様子 | で・こぼれ落ちる | 私 | の | 恋の | 涙 | であるなあ。

夜もすがら 一晚中。「一日中」は「ひねもす・ひすがら・日暮らし」。

閨(ねや) 「寢屋」が語源。

閨のひまさへ 「さへ」は同種のを添加する意味の副助詞。

50

出典

千載集・卷十二・恋二・766

嘆けとて 「とて」は「とて」との省略形。「と」の後には「言ふ」が多く使われるので、省略しても分かるからだ。

19・63

月やは 百人一首には、月を詠み込んだ歌が、次のように十二首もある。7・21・23・

作者

西行法師。元永元年（1118）～建久元年（1190）、俗名佐藤義清（のりきよ）、二十三歳で出家。

品詞分解・句切れ・係り結び

嘆け | と | て | 月 | や | は | もの | を | 思は | する 。かこち顔 | なる | わ | が | 涙 | かな
カ四命 | 格助 | 接続助 | 名 | 係助 | 係助 | 名 | 格助 | 八四末 | 助動使役体。 名 | 助動断定体 | 代名 | 格助 | 名 | 終助詠嘆

87

村 雨 | の | | 露 | | も | まだ | 干 (ひ) | ぬ | 真木 | の | 葉 | | に |
にわか雨 | の | 残して行った | 霰 (しずく) | も | まだ | 乾か | | ない | 真木 | の | 葉 | の周囲に、

霧 | | 立ち昇る | | 秋 | の | 夕暮れ |
霧 | が | 立ち昇る、寂しくも静かな | 秋 | の | 夕暮れ | であることよ。

作者

寂蓮法師。生年未詳～建仁2年（1202）、藤原俊成の弟俊海の子。俊成の養子。新古今集の撰者。

品詞分解

村雨 | の | 露 | も | まだ | ひ | | ぬ | 真木 | の | 葉 | に | 霧 | 立ち昇る | 秋 | の | 夕暮れ
名 | 格助 | 名 | 係助 | 副 | 八上一末 | 助動打消体 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | ラ四体 | 名 | 格助 | 名

30・31・36・57・59・68・
79・81・86 これらの歌の月
の形、見える方角、季節、時
刻、そして詠み手の境遇や感
懐の違いを比べても面白いだ
ろう。

出典

千載集・巻十五・恋五・929

干ぬ 「干」は八行上一段「干
る」の未然形。この語は「潮
干狩り」、「干潟」などの語の
中に残っており、「潮が引いて
砂浜が乾く」「水分が乾く」と
いう意味である。 92

秋の夕暮れ このように名詞
で終わる形式を「体言止め」
と言う。

真木 杉や桧（ひのき）など
の常緑樹の総称。

出典

新古今集・巻五・秋下・491

品詞分解・係り結び

難波江 | の | 芦 | の | 仮寝 | の | 一夜 | ゆゑ | 身 | を | 尽くし | て | や | 恋ひ | わたる | べき
 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 名 | 名 | 格助 | サ四用 | 接続助 | 係助 | 八上一用 | ラ四終 | 助動推量体

89

| 玉の緒(を) | よ | 絶え | な | ば | | 絶え | ね | |
 《緒》 《絶え》

私の | 命 | | よ、絶え | てしまふ | ならば、 | いっそのこと | 絶え | てしまえ。

| 長らへ | ば | | | 忍ぶる | こと | の | 弱り | も | ぞ | する
 《長らへ》 《弱り》

| もし、
 命が | 長らえ | たならば、 | 恋心が暮って、 | 耐え | 忍ぶ | 力 | が | 弱り | も | ぞ | する | だろう、
 その結果、 | 人に知られること | になっては | 困るから。

作者

式子(しょくし)内親王。生年未詳～建仁元年(1201)、後白河上皇の皇女。賀茂の斎院。

文法

未然形+接続助詞の「ば」は仮定を表す。

「絶えなば」の「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形。「長らへ」は動詞「長らふ」の未然形である。未然形に接続助詞の「ば」を付けると、仮定を表すことになる。未然形には、まだそうっていない状態を見ながら、そうなった状態を想像する意味がある。「花は咲いていない、花が咲いたことを想像する、すると、きれいだろうなあ」と言う、「花が咲いたら、きれいだろうなあ」という意味になる。

品詞分解・句切れ・係り結び

玉の緒 | よ | 絶え | な | ば | 絶え | ね 。 | 長らへ | ば | 忍ぶる | こと | の | 弱り | も | ぞ | する
 名 | 間投助 | ヤ下二用 | 助動完了未 | 接続助 | ヤ下二用 | 助動完了命。 | 八下二未 | 接続助 | パ上二体 | 名 | 格助 | ラ四用 | 係助 | 係助 | サ変体

玉の緒 「玉(魂)を肉体に繋ぎとめる紐」、つまり命の意。玉の緒と緒は「命」と「紐」の二重の意味で使われている。絶えも「命が絶える」と「紐が切れる」、長らへは「命が長らえる」と「紐が長く伸びる」、弱りは「忍んで人に隠す力が弱る」と「紐が弱くなる」の、それぞれ二重の意味を持っている。そこで、緒・絶え・長らへ・弱りは縁語。弱りもぞする 「もぞ」は危惧を表す。72の「文法 もこそ」を参照。

出典

新古今集・巻十一・恋一・1034

恋の涙で色が変わってしまったこの私の袖を、あなたに | お見せし | たいものです | な |

あな古歌にある | 雄島 | の | あま | の | 袖 | だに | も | | 濡れ | に | ぞ | 濡れ | し |
雄島 | の | 漁師 | の | 袖 | さえ | も、波で | 濡れ | に | ! | 濡れはし | た | けれど、

私の袖のように | 色 | は | 変はら | ず
私の袖のように | 色まで | は、変わら | なかったですよ。

作者

殷富(いんぷ)門院大輔。生没年未詳。後白河天皇の皇女殷富門院(式子内親王の姉)の女官。

文法

副助詞の「だに」

「袖だにも」の「だに」は軽いものを挙げてそれより重いものを類推させる働きをする。この場合の「軽いもの」は「濡れはしたけれど、色までは変わらなかった雄島のあまの袖」、「重いもの」は「恋の涙で色まで変わってしまった私の袖」である。 [51]・[65]

参考

本歌取り

この歌は、次の歌を本歌とする本歌取りの歌である。

松島 | や | | 雄島 | の | 磯 | に | あさり | せ | し | 海人 | の | 袖 | こそ |
松島 | よ! | その | 雄島 | の | 磯 | で | 漁 | を | し | て | いた | 漁師 | の | 袖 | は | あなたの | ために | 涙で | 濡れた | 私の | 袖 | の | ように、

かく | は | 濡れ | しか |
こんなに | も | 濡れ | て | いた | と | 記憶 | して | います。(源重之・後拾遺集・卷十四・恋四・827)

本歌取りは、[1]・[2]・[4]などの歌のように、原歌を多少改作したり語句を変えるものではなく、原作である本歌の主題や語句のイメージを踏まえ、それを生かしながら、まったく新しい歌を作るものである。この場合も、本歌の「雄島の海人の袖はこんなに濡れていただろう」という内

雄島 宮城県松島湾の中の島の
一つ。

あま 「海人・海士・海女・
蜃」などを書く。「尼」とは別
の名詞。「尼」は梵語の音訳で、
原義は「母」の意。 [11]

だに 文法

出典

千載集・卷十四・恋四・886

濡れしか 「しか」は回想過
去の助動詞「き」の已然形で、
過去の事実をはっきり記憶し
ていることを表す。 [38]・

[41]・[75]

容をそのまま本歌取りの歌に取り入れ、それに「見せはやな」「色は変はらず」などの新しい内容を付け加えている。

品詞分解・句切れ・係り結び

見せ | ばや | な。雄鳥 | の | あま | の | 袖 | だに | も | 濡れ | に | ぞ | 濡れ | し。色 | は | 変はら | ず
サ下二末 | 終助希望 | 間投助。名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 副助 | 係助 | ラ下二用 | 格助 | 係助 | ラ下二用 | 助動回想過去体。名 | 係助 | ラ四末 | 助動下消終

初句・四句切れ。

91

きりぎりす | 鳴く | や | 霜 | 夜 | の | さ | 筵 (むしろ) | に | 衣 | 片 | 敷き |
こおろぎ | が | 鳴く | ! | 霜 | の | 降りる夜 | の | 寒い |
むしろ | に、自分の衣の | 片袖 | を床に敷いて |

きりぎりす 現在の「こおろぎ」のこと。その反対に、昔の「こおろぎ」は現在は「きりぎりす」と呼んでいる。

出典

新古今集・巻五・秋下・518

ひとり | か | も | 寝 | む |
私は、ひとり | で | | 寝る | の | だろう | か | なあ。

作者

後京極攝政前太政大臣（藤原良経）、嘉応元年（1169）～建永元年（1206）、後鳥羽院側近の筆頭。

品詞分解・係り結び

きりぎりす | 鳴く | や | 霜 | の | さ・筵 | に | 衣 | 片敷き | 独り | か | も | 寝 | む
名 | カ四終 | 間投助 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | カ四用 | 名 | 係助 | 係助 | ナ下二末 | 助動推量体

92

わ | が | 袖 | は | 潮 | 干 (しほひ) | に | 見え | ぬ | 沖 | の | 石 | の |
私の | 着物の | 袖 | は、潮 | が引 | いた時 | にも | 見え | ない | 沖 | の | 海の底の石 | のように、

潮干に見えぬ沖の石のは人こそ知らね以下を呼び出すための序詞。

人 | こそ | 知ら | ね | | 乾(かわ) | く | 間 | も | なし
人 | は | 知ら | ない | だろうが、いつもあなたを恋い慕う涙で濡れて、乾 | く | 暇 | も | ありません。

作者

二条院讃岐。平安末期から鎌倉初期。二条院、後鳥羽院の中宮に仕えた女官。源三位頼政の娘。

品詞分解・係り結び

わ | が | 袖 | は | 潮干 | に | 見え | ぬ | 沖 | の | 石 | の | 人 | こそ | 知ら | ね | 乾く | 間 | も | なし
代名 | 格助 | 名 | 係助 | 名 | 格助 | ヤ下二末 | 助動形 | 消体 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 係助 | ナ四末 | 助動形 | 消已 | カ四体 | 名 | 係助 | 形容ク終

93

世の中 | は | | 常 | に | | もがも・な | | 渚 | | 漕ぐ | |
この世の中 | は、無常ではなく | 不変 | で | あってほしいものだ・なあ。あの | 渚 | を | 漕いで | 漁をする |

海人(あま) | の | 小舟(をぶね) | の | 綱手(つなで) | | 愛(かな) | し | も
漁師 | の | 小舟 | | の | 引き綱 | | を引く姿は、切なくいとおいしい | ものだよ。

作者

鎌倉右大臣(源実朝)。建久3年(1192)~承久元年(1219)。源頼朝の次男。藤原定家に師事した。

品詞分解・句切れ

世の中 | は | 常 | に | | もがも | な 。 渚 | 漕ぐ | あま | の | 舟 | の | 綱手 | かなし | も
名 | 係助 | 名 | 助動断定用 | 終助希望 | 終助詠嘆。名 | カ四体 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 形容シク終 | 係助

潮干 「干(ひ)」は動詞「干る」(八行上一段)の連用形でもある。「干る」は「乾く」という意味である。 87

沖の石 宮城県多賀城市の海岸近くに「末の松山」という歌枕があり(42) その近くに「沖の石」とも「沖の井」とも呼ばれる名所があるが、関係があるかも知れない。

出典

千載集・卷十二・恋二・760

出典

新勅撰集・卷八・羈旅・525

み吉野 | の | 山 | の | 秋風 | | さ・夜 | | 更け | て |
吉野 | の | 山 | の | 秋風 | が吹きわたり、 夜 | が | 更け | て、

| ふる さと | | 寒く | 衣 | | 打つ | | な り
[音・あり]

この | 古い都の跡の里 | は | 寒く、
| 寒々と | 衣 | を | 打つ | 砧の | 音が聞こえてくる。

作者

参議(藤原)雅経。嘉応2年(1170)~承久3年(1221)。藤原俊成に私事。新古今集の撰者の一人。蹴鞠の飛鳥井家の祖。

参考

本歌取り この歌は、次の坂上是則の歌(古今集・巻六・冬・325)を本歌とする、本歌取りの歌である。参議雅経の歌は、本歌に「秋風」「さ夜」「衣を打つ砧の音」を加え、視覚・聴覚・寒さなどの感覚を生かした歌に作り変えている。

み吉野 | の | 山 | の | 白雪 | | 積もる | | らし | | ふるさと | | 寒く | なり | まさる | | なり
吉野 | の | 山 | の | 白雪 | が | 積もっている | ようだ。この 古い都 | は | | だんだんと |
| 寒く | なっ | てゆく | | ので分かる。

品詞分解

み吉野 | の | 山 | の | 秋風 | さ・夜 | 更け | て | ふるさと | 寒く | 衣 | 打つ | | なり
名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 名 | カ下二用 | 接続助 | 名 | 形容ク用 | 名 | 夕四終 | 助動伝聞推定終

おほけなく | うき 世 | の | 民 | に | おほふ | | かな |
身の程をわきまえず、つらいこの世 | に生きる | 民衆 | に | 覆い 掛ける | 立場になることだなあ。

ふるさと寒く 「は」を補っている。補う助詞は「をにのはが」と憶えるとよい。

ふるさと 吉野には古く天武天皇などの離宮があったので、「旧都・古京」などの意味でふるさとと呼んでいる。

衣打つなり 「を」を補っている。「なり」は伝聞推定の助動詞で、「音(ね)あり」が語源だと言う。本歌取り 90
積もるらし 「らし」は根拠を示して推定する意味の助動詞。

出典

新古今集・巻五・秋下・483

わ | が | 立つ | 袖 (そま) | に | 墨染め | の | 袖 |
私 | が | これから行く | 杣山 (比叡山) で、仏道修行をする | 墨染め | の | 衣の袖 | を。

作者

前大僧正慈円。久寿2年(1155)～嘉禄元年(1225)。関白藤原忠通の子で、九条兼実の弟。

鑑賞

作者は名門貴族の家に生まれながら、最澄の開いた京の青蓮院に幼くして入り、12歳で授戒、比叡山に入って修行を始め、38歳で天台座主に就任、その後も含め、生涯で4度その職に就いた。この歌は、その若い頃の宗教的熱意を表明したものである。天台座主でありながら、新しい民衆仏教を模索した法然や親鸞などへも理解を示している。政治の面でも京の公家と鎌倉幕府の協調、和解を理想とし、後鳥羽上皇の挙兵(承久の乱)に反対し、『愚管抄』はそのために書いたとも言われる。乱後の鎌倉幕府の公家方に対する政策にも反対している。

品詞分解・句切れ

おほけなく | うき世 | の | 民 | に | おほふ | かな 。 わ | が | 立つ | そま | に | 墨染 | の | 袖
形容ク用 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 八四終 | 終助詠嘆。代名 | 格助 | 夕四体 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名

96

花 | 誘ふ | 嵐 | の | 庭 | の | 雪 | なら | で |
〔に・あら〕

花 | を | 誘って | 散らす | 強い風 | が | 吹く | 庭 | の | 雪のように散る花 | で・は・なく | て、

降り 行く | もの | は | わ | が | 身 | なり | けり
古り 行く | 〔に・あり〕

降る | もの | は |
年老いて | 行く | もの | は | 実は、我 | が | 身 | で・あつ | たのたなあ。

作者

入道前太政大臣(藤原公経(きんつね))。承安元年(1171)～寛元2年(1244)。

杣 植樹をして、きこりが材木を採る山。杣山。ここは比叡山を「卑しい山」と謙遜して言ったもの。

出典

千載集・巻十七・雑中・1137

嵐 ものを吹き散らす強い風。 ☒

嵐の庭の雪 この「雪」は散る花を降る雪に喩えたもので、雪が降っているわけではない。

出典

新勅撰集・巻十六・雑一・1054

品詞分解

花 | 誘ふ | 嵐 | の | 庭 | の | 雪 | なら | で | ぶり行く | も | は | わ | が | 身 | なり | けり
名 | 八四体 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 助動断定未 | 接続助 | カ四体 | 名 | 係助 | 代名 | 格助 | 名 | 助動断定用 | 助動詠嘆終

97

来(こ) | め | 人 | を | | 松帆(まつほ)の浦 | の | タなぎ | に |
待つ |
待っても | 来 | ない | あなた | を | 私は | 待っています | 、
あの松帆 | の浦 | の | タなぎ | の頃に、

焼く | や | 《藻塩(もしほ)》 | の | 身 | も | 焦がれ | つつ
《焦がれ》
海辺で | 焼いている | ! | 藻塩 | が | | 焼け焦げる |
| ように、わが身 | も | 思い焦がれ | ながら。

作者

権中納言(藤原)定家。応保2年(1162)~仁治2年(1241)、藤原俊成の子。新古今集の撰者。

品詞分解

こ | め | 人 | を | 松帆の浦 | の | タなぎ | に | 焼く | や | もしほ | の | 身 | も | 焦がれ | つつ
カ変未 | 助動打消体 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | カ四体 | 間投助 | 名 | 格助 | 名 | 係助 | ラ下二用 | 接続助

98

風 | そよぐ | | | ならの 小川 | の | 夕暮れ | は |
| 榎 | |
風が | そよそよと音を立てる | | 榎の葉 | 、
| その | ならの 小川 | の | 夕暮れ | は | 秋のように涼しいが、ただ、

松帆の浦の夕なぎに焼くや藻塩のは身も焦がれつつを呼び出すための序詞。

松帆の浦 淡路島の北端にある海岸の名前。

松と待つは掛詞(かけことば)

焼くや 昔の製塩法で、海水を含ませた海藻(藻塩・藻塩草)を焼いて塩を作った。

焦がれ 身も「焦がれ」と藻塩の「焦がれ」は掛詞。

藻塩と焦がれは縁語。

出典

新勅撰集・卷十三・恋三・851

ならの小川 京都市北区上賀茂神社の御手洗川(みたらしがわ)の別名。御手洗川は、参拜者が手や口など身を清めるための川。

| 御禊(みそぎ) | | ぞ | 夏 | | の | しるし | なり | ける
[に・あり]

そこで行われている | 御禊の行事 | | が | 特に、今が夏であること | の | 証拠 | で・ある・のだ | なあ。

作者

従二位(藤原)家隆、保元3年(1158)~嘉禎3年(1237)、俊成を師とした。新古今集の撰者。

品詞分解・係り結び

風 | そよぐ | ならの小川 | の | 夕暮れ | は | みそぎ | ぞ | 夏 | の | しるし | なり | ける
名 | ガ四体 | 名 | 格助 | 名 | 係助 | 名 | 係助 | 名 | 格助 | 名 | 助動断定用 | 助動態和嘆体

99

人 | | も | 愛(を)し | | 人 | | も | 恨めし | |
ある時には、人 | が | | いとおしく | も | ある。また、ある時には、人 | が | | 恨めしく | も | 思われる、

あぢきなく | 世 | | を | 思ふ | ゆゑ | に | | もの | | 思ふ | 身 | | は
| 今の世の中 | を |
苦々しく | | 思う | 故 | に、様々に | もの | を | 思う | 我が身 | にとって | は。

作者

後鳥羽院。治承4年(1180)~延応元年(1239)、第82代。承久の変に破れ、隠岐で崩御。

鑑賞

この歌は自然の美しさを詠んだり、恋を詠んだりする歌とは違い、人間と社会に対する作者の批判的なうっ屈した気持ちを詠んだものである。作者が12歳の時、鎌倉幕府が成立した(1192)、作者は幕府の政治に強い不満を抱き、また、公家の権力と文化の衰退を嘆き、これを回復するために心を砕いた。しかし「承久の乱」で敗北して隠岐島に流され、院独自の新古今和歌集の編集(隠岐本)などに精魂を傾けながら、在島19年のまま崩御した。

ならの小川と櫓は掛詞。

禊ぞ 「ぞ」はその事を強く指示して強調する意味で、限定する意味はない。「禊だけが」などと訳すのは、厳密には意識である。

出典

新勅撰集・巻三・夏・192

人もは同音反復。

思ふは同音反復。

品詞分解・句切れ

人 | も | をし 。 人 | も | 恨めし 。 あぢきなく | 世 | を | 思ふ | ゆゑ | に | もの | 思ふ | 身 | は
名 | 係助 | 形容シク終。 名 | 係助 | 形容シク終。 形容ク用 | 名 | 格助 | 八四体 | 名 | 格助 | 名 | 八四体 | 名 | 係助

初句・二句切れ。

出典

続後撰集・巻十七・雑中・1199

100

ももしき | や | | 古き | | 軒端 | の | 忍ぶ | | に | | も |
| 偲ぶ | |
宮 城 | よ、この | 古ぼけた | 御殿の | 軒端 | の | 忍ぶ草を見る | に | つけても、皇室の衰微が思われるが、
| 偲ん | | で | | も |

ももしき 百敷。宮城。皇居。
宮中。内裏。

なほ | | あまり | ある | | 昔 | | なり | けり
[に・あり]

なりけり 「けり」は発見詠
嘆。 32

やはり (偲ぶに | あまり | ある)
| 偲び | つくせない | ほどの | 昔 | の栄華 | で・ある | ことだなあ。

出典

続後撰集・巻十八・雑下・1202

作者

順徳院。建久8年(1197)~仁治3(1242)、第84代。後鳥羽院の第三皇子。佐渡に配流、崩御。

品詞分解

ももしき | や | 古き | 軒端 | の | 忍ぶ | に | も | なほ | あまり | ある | 昔 | なり | けり
名 | 間投助 | 形容ク体 | 名 | 格助 | 名 | 格助 | 係助 | 副 | 名 | ラ変体 | 名 | 助動断定用 | 助動断定終

